

神戸21世紀・復興記念事業継続事業  
りぶ・らぶ・あにまるず 国際シンポジウム2004

# 『子ども達と動物達を救うために～犬と歩む更生の道』

Kobe 21st Century Restoration Commemorative Project  
2004 LIVE LOVE ANIMALS – AN INTERNATIONAL SYMPOSIUM

## 'Rescuing Children and Animals – Rehabilitation Methods Involving Dogs'

2004年国際シンポジウム記録集



NPO法人Knots  
NPO Knots

# 目次

神戸21世紀・復興記念事業継続事業

りぶ・らぶ・あにまらず国際シンポジウム2004

## 『子ども達と動物達を救うために～犬と歩む更生の道』

開催概要	p. 2
<b>抄 録</b>	p. 3 - 11
ジョアン・ドルトン / プロジェクト・プーチ社 常務取締役	p. 4 - 5
青山幸克 / 法務省 奈良保護観察所 所長	p. 6 - 7
影山任佐 / 東京工業大学教授 精神神経科学	p. 8
山口千津子 / (社)日本動物福祉協会 獣医師調査員	p. 9
座長：山崎恵子 / ペット研究会「互」主宰	p. 10
謝辞：富永佳与子 / NPO 法人 Knots 代表	p. 11
<b>記 録 集</b>	p. 13 - 45
冒頭スピーチ	p. 14
話題提供 『少年院でのドッグ・トレーニング』 ジョアン・ドルトン / プロジェクト・プーチ社 常務取締役	p. 15 - 23
パネラースピーチ	
青山幸克 / 法務省 奈良保護観察所 所長	p. 24 - 27
影山任佐 / 東京工業大学教授 精神神経科学	p. 28 - 36
山口千津子 / (社)日本動物福祉協会 獣医師調査員	p. 37 - 38
パネルディスカッション	p. 39 - 45
座長 山崎恵子 / ペット研究会「互」主宰	
パネラー ジョアン・ドルトン 青山幸克 影山任佐 山口千津子	

神戸 21 世紀・復興記念事業継続事業  
 りぶ・らぶ・あにまらず 国際シンポジウム 2004  
 『子ども達と動物達を救うために～犬と歩む更生の道』

開催日時 2004 年7月11日(日)13:00 - 16:00  
 開催場所 ポートピアホテル 本館地下 1 階「布引・北野の間」  
 目的 凶悪犯罪者のリハビリテーションに、ドッグトレーニングが果たし得る大きな役割についての最新情報を提供し、考察を深めることにより、青少年の凶悪犯罪を減らし、傷ついた子ども達の社会復帰に寄与します。同時に、人と動物の共生関係についての理解も深め、動物福祉向上への一助とします。  
 主催 特定非営利活動法人 Knots  
 特別協賛 ネスレピュリナペットケア株式会社  
 協賛 アサヒビール株式会社/株式会社カワイ音響システム  
 助成 (財)中内力コンベンション振興財団  
 後援 兵庫県/神戸市/兵庫県教育委員会/神戸市教育委員会/  
 (社)日本獣医師会/(社)兵庫県獣医師会/(社)神戸市獣医師会/  
 (財)日本動物愛護協会/(社)日本動物保護管理協会/  
 (社)日本動物福祉協会/(社)日本愛玩動物協会/  
 (社)日本動物病院福祉協会/  
 駐大阪・神戸アメリカ合衆国総領事館関西アメリカン・センター

・座長  
 山崎恵子氏/ペット研究会「互」主宰  
 ・話題提供  
 ジョアン・ドルトン氏/プロジェクト・プーチ社常務取締役  
 ・パネリスト  
 ジョアン・ドルトン氏  
 青山幸克氏/法務省 奈良保護観察所 所長  
 影山任佐氏/東京工業大学 精神神経科学 教授  
 山口千津子氏/(社)日本動物福祉協会 獣医師調査員

プログラム

13:00 開会宣言  
 13:05 話題提供 (60 分)  
 『少年院でのドッグ・トレーニング』  
 14:05 休憩 (5 分)  
 14:10 国内パネリストによるスピーチ (各 20 分)  
 15:10 休憩 (5 分)  
 15:15 パネルディスカッション及び質疑応答  
 16:00 終了

**Kobe 21st Century Restoration Commemorative Project**  
**2004 LIVE LOVE ANIMALS – AN INTERNATIONAL SYMPOSIUM**  
**‘Rescuing Children and Animals – Rehabilitation Methods Involving Dogs’**

Date : Sunday 11th July 2004

Venue : Portopia Hotel, Kobe, Japan

Objective : By examining the most current information relating to the great contribution of dog training for the purpose of rehabilitating serious criminals, and by addressing the issues still further, the symposium aims to find ways to reduce juvenile delinquency and contribute to rehabilitating delinquents. At the same time, this discussion will deepen our understanding of the relationships in human animal co-existence and help to improve animal welfare.

Organizer : NPO Knots

Special Sponsor : Nestlé Purina PetCare

Sponsor : ASAHI BREWERIES, LTD., Kawai Acoustic System Co.,Ltd

Organizationr : Tsutomu Nakauchi Foundation,

Supporting Organizations Hyogo Prefecture, Kobe City,  
 : Hyogo Prefecture Board of Education,  
 Kobe City Board of Education,  
 Japan Veterinary Medical Association,  
 Veterinary Association of Hyogo Prefecture,  
 Veterinary Association of Kobe City,  
 Japan Society for the Prevention of Cruelty to  
 Animals, JSPCA, JAPANESE SOCIETY OF  
 HUMANE CARE OF ANIMALS,  
 Japan Animal Welfare Society,  
 Japan Pet Care Association,  
 Japanese Animal Hospital Association (JAHA),  
 Osaka Kobe Consulate General of the USA, Kansai American Center.

Chairperson: - Ms. YAMAZAKI Keiko Companion Animal Study Group “Go”  
 Core Topic: - Dr. Joan Dalton (USA), Executive director, Project POOCH, Inc.

Panelists: - Dr. Joan Dalton  
 - Mr. AOYAMA Yukikatsu, Director of Nara Probation Office,  
 Rehabilitation Bureau, Ministry of Justice  
 - Dr. KAGEYAMA Jinsuke, Professor of Neuro-Psychiatric  
 Science, Tokyo Institute of Technology  
 - Dr. YAMAGUCHI Chizuko, Veterinary Inspector of  
 Japan Animal Welfare Society

PROGRAM

13:00 Opening Declaration  
 13:05 Core Topic (1 hour)  
 ‘Dog Training at Reformatories’  
 14:05 Break (5mins.)  
 14:10 Speeches by Panelists: (each 20mins.)  
 15:10 Break (5mins.)  
 15:15 Panel Discussion, Questions and Answers (45mins.)  
 16:00 Close

神戸 21 世紀・復興記念事業継続事業  
りぶ・らぶ・あにまるず 国際シンポジウム 2004

# 『子ども達と動物達を救うために～犬と歩む更生の道』

## 抄 録

**Project POOCH** (Positive Opportunities, Obvious Change, With Hounds)

A program for youth offenders at the MacLaren Youth Correctional Facility  
Woodburn Oregon, U.S.A.  
Executive Director Project POOCH, Inc. Woodburn, Oregon, U.S.A.

Joan K. Dalton, M.S.T.



Project POOCH began in 1993 as a therapy to help males (ages 14-24) that were locked up in juvenile correctional facilities for crimes such as robbery, rape, and murder. Many of these males had dropped out of secondary school due to learning problems, disinterest in what was taught, or drug and alcohol abuse.

I had been a secondary education teacher for twenty years in the largest city in Oregon. After coming to the correctional system to help youth become successful learners, I discovered that they often were poor readers, poor listeners and had a difficult time paying attention to their teachers. I was familiar with dog programs in the adult prisons in the United States but there were none for teenage offenders. After two years of planning, we brought our first dog from a local dog shelter to the correctional facility, where the youth that were learning how to work with wood (called the building trades), had built a kennel.

All of the boys or young males like having a dog to play with, feed and walk. It gives them an opportunity to learn how to care for another living being and receive unconditional love in return.

Once the dogs are given all necessary vaccinations and have been spayed/neutered and obedience trained, they are adopted by families looking for a trained companion.

All of the dogs in Project POOCH come from

local dog shelters and have problems such as excessive barking, jumping on people, aggressiveness or other out of control behaviors. The youth also demonstrate behavior problems such as being out of control, dislike for authority, poor social manners and lack of past experience in the development of responsibility, patience or work ethic. Problem youth and problem dogs are paired together so that they can learn acceptable behavior from each other.

Project POOCH also teaches youth skills for future employment such as dog grooming, dog boarding, dog training, dog kennel management, and assisting with veterinary hospital Procedures. Youth receive money for dog grooming and boarding. This money goes to pay back victims of their crimes and to help the youth pay for a place to live when they are released from the system.

Recent research indicates that of the youth followed after leaving corrections, none have returned to the correctional system. Although the youth in this research do not represent all that have been in Project POOCH over the past ten years, it does provide promising outcomes for the ability of dogs to teach troubled youth responsibility, patience, compassion and a positive work ethic.

## プロジェクト「プーチ」(犬達と共に 前向きに変わろう)

アメリカ、オレゴン州、ウッドバーンにあるマクラレン少年院（更生施設）における、  
青少年犯罪者のためのプログラム

プロジェクト・プーチ社常務取締役

### ジョアン・K・ドルトン

プロジェクト「プーチ」は1993年、窃盗、暴行、殺人などで少年院（青少年更生施設）に収容されている若い男性（14歳～24歳）の更生を助けるセラピーとして開始されました。このような人達の多くは、学習面で問題があったり、やる気がなかったり、薬物やアルコールの乱用のせいで、学校（中等教育）から落ちこぼれた人達です。

私はオレゴン州一大きな都市で学校（中等教育）の教師を20年以上していました。更生プログラムに関わり、若者が立派な学習者になる手助けをするようになったのですが、彼らはしばしば、読むことや聞くことが苦手で、先生の授業に集中することが難しいのだということがわかりました。私はアメリカの成人の刑務所でのドッグプログラムについては知っていましたが、10代の犯罪者向けにはまだこのようなものはありませんでした。2年かけて計画を立て、私たちは最初の犬を地元のドッグシェルターから更生施設に連れてきました。木工を学習していた青年が犬小屋を作ってくれました。

青少年は全員、犬と遊んだり、触れたり、散歩させたりすることが大好きでした。犬は彼らに他の生き物の世話をすることを学ばせてくれ、その引き換えに無条件の愛情を示す機会を与えてくれます。犬達は、必要な全ての予防接種を受け、去勢され、躰トレーニングを受けた後に、調教されたコンパニオンを求めるファミリーに貰われて行きます。

プロジェクト「プーチ」で使われる全ての犬は、地元のドッグシェルターから来るため、無駄鳴き、飛びつき、攻撃癖その他制御できない行動をす

るなど、問題を抱えています。また施設の若者も、自制できない、権力を嫌う、社会的マナーがない、経験を通して責任感、忍耐、仕事をするのに必要な道徳が発達していないことから来る問題行動をします。つまり、問題のある若者と、問題のある犬達が一緒になることで、お互いから受け入れられるような姿勢を学ぶことができるのです。

またプロジェクト「プーチ」では、犬のグルーミング、ボーディング、調教やケネルのマネージメント、獣医療院でのアシスタントなど、将来の就職に役立ちそうな技術を学ぶことができます。犬のグルーミングやボーディングで若者はお金を稼ぐことができます。それは、若者が自分の罪の償いのための被害者への支払いや、施設から釈放された後の生活の場の確保のために使われたりします。

最近の調査では、この更生施設を出た若者で追跡調査をした者達の中で、誰一人として再び更生施設に収容された者はいないということがわかりました。この調査は、プロジェクト「プーチ」に過去10年関わった全員について行われたわけではありませんが、犬達に、問題を抱えた青年達に責任感や忍耐、慈悲の心や仕事への前向きな姿勢を教える能力があることを、立派に証明してくれていると思います。

法務省 奈良保護観察所 所長  
青山 幸克



神戸の14歳中学生による猟奇的な殺人事件等を契機に少年事件の処分の厳罰化が図られ、平成13年4月改正少年法が施行されました。しかしその後も非行は減少することなく、特に少年院新収容者数は平成14年5,962名に達し、これは平成7年の約1.5倍で過剰収容問題が深刻な状況にあります。

少年院も、ここ数年収容定数をオーバーし、居室不足(4名のスペースに6名収容等)洗面・トイレ不足からのトラブル発生：夜間一人の教官が20名を上回る収容少年の指導(掃除、洗濯等の基本的な生活態度の指導から日記等の個別指導迄)等に対応困難な状況が続きました。

本日のメインテーマである動物セラピーについて、神戸の事件後「生命の尊重教育」の一環として全国の少年院で熱帯魚の飼育や関東医療少年院で盲導犬との触れ合い等のプログラムが導入されましたが、過剰収容のもと動物の管理が困難となり新規の取組みは中断の止むなきに至っており、我国では更生のプログラムとしての動物セラピーの取組みは無いのが実情です。

#### 奈良少年院における読書を通しての動物セラピーの成果について

度重なる非行から2度目の少年院収容となったY少年は、1歳時父親の暴力から実母は蒸発。以降養護施設で生育し、小学校4年時に現れた実母と義父に引き取られますが、家族になじめず家出と非行を繰り返し、長期施設収容生活に至っています。収容少年の読書感想発表会で「ドッグシェルター 犬と少年たちの再出航」を発表したY少年は、感想文の中で「犬を愛し、犬と共に過ごした少年院の100人を超す子供達は、再犯を犯さなかった。それはジョアンさん

と共に犬を通して行く中で無条件の愛を感じられたからと思います。私はこれまで親の愛を受けたことがなかったように思います。……この本を読むことで親が子供に与える愛の必要性を知った上で、私は子供に対して無条件の愛を教えられるような人間になりたいです。」と平素は無気力・無愛想なY少年が、声を震わせて熱弁を振るう従来見られなかった姿に職員もドッグシェルターの読書によって感銘を受けたY少年が更生の道を歩んでくれればと期待を寄せています。

#### 矯正施設収容中の環境調整について

少年が、出院後社会復帰する上で、収容前の少年を取り巻く様々な問題(家族関係、交友関係、就労先の確保等)が改善されていなければなりません。そのため矯正教育と並行して帰住予定地(少年の場合通常は保護者のもと)の環境調整を行い非行の要因となっている環境の改善を図ります。

#### 仮釈放後の保護観察

矯正施設で成績が最上級となり帰住環境が受入可能等の条件が整えば、仮釈放となり期間中保護観察に付されます。保護観察では矯正教育・環境調整との有機的連携に努め、民間のボランティアである保護司が毎月面接し、生活指導、職業補導等を実施しています。

保護観察では、少年事件(交通事件を含む)の約7割が良好解除と相応の効果を上げていますが、保護観察官のケースの加重負担、保護司の高齢化等の問題を内包し、少年院と同様厳しい執務状況であります。

Director of Nara Probation Office, Rehabilitation Bureau, Ministry of Justice  
AOYAMA Yukikatsu

In response to a number of violent crimes perpetrated by juveniles in Japan during the 1990s, including a bizarre murder in Kobe committed by a 14-year-old junior high school student, a movement arose to promote tougher punishments for young offenders in criminal cases. This led the enactment of the revised Juvenile Law, which went into effect from April 2001. However, the existence of the revised law has not led to a decline in juvenile delinquency. In particular, the number of young offenders sent newly to reformatory reached 5,962 in 2000, approximately 1.5 times the corresponding number in 1995, with the result that the nation's reformatories are now facing a serious overcrowding situation.

Over the past few years, as the number of reformatory inmates has exceeded the capacity of the facilities, and the difficult living conditions that ensue have continued to contribute to outbreaks of trouble among the inmates. There are shortages of living rooms (with six inmates living in space designed to accommodate four), bathrooms and toilets, and at night one instructor has to guide over 20 juvenile inmates in activities ranging from basic lifestyle tasks such as cleaning and washing to individual tasks like diary keeping, etc.

Animal-assisted therapy, which became a major theme following the Kobe murder incident, was introduced in the form of rehabilitation programs such as tropical fish breeding at reformatories all over Japan, or contact with guide dogs as in the case of the Kanto Medical Reformatory. However, due to the current overcrowding situation the management of animals has become difficult, forcing the reformatories to stop tackling new initiatives. Consequently, the actual situation is that no actual animal-assisted therapy is currently being conducted in the context of juvenile reform programs.

#### Result of Animal-Assisted Therapy through Reading at Nara Reformatory

Juvenile Y was sent to a reformatory for the second time following repeated instances of delinquency. When he was an infant, his biological mother disappeared because of the violent behavior of his father. Following that he was raised in a children's home until he was in the fourth grade of elementary school, at which time his mother reappeared and took him back to live with her and his father-in-law. However, unable to form bonds of familiarity with his mother and farther-in-law, he repeatedly ran away from home and engaged in repeated acts of delinquency. As a result, he was sent to a reformatory where he spent a long period. At a juvenile inmates' book report meeting at his reformatory, Juvenile Y announced a book report entitled *Dog Shelter—A Relaunching of Dogs and Boys*. In his report, he spoke as follows.

"More than 100 children who loved dogs and passed time with them didn't go on to commit crimes again. I think that the reason was because they were able to feel unconditional love through their experiences of living with and taking care of dogs together with Joanne. I feel that I personally haven't received love from my parents up until now... Since reading this book, I've become aware of the necessity of the love that parents give their children, so I'd like to become a person who can teach unconditional love to children."

Juvenile Y, who normally appears spiritless and abrupt, spoke enthusiastically in a quivering voice. Since seeing this side of him that they had not witnessed before, the staff are now hopeful that juvenile Y, who was impressed by the book he read about a dog shelter, will now travel the path to rehabilitation.

#### Adjusting the Outside Living Environment While the Offender is in Care

By the time that a young offender becomes re-socialized after being released from a correctional facility, the various problems that surrounded them before they were institutionalized (including family relations, associate relations, securing of a working place, etc.) should have been solved. Accordingly, in parallel with providing a correctional education, we carry out environmental adjustment at the place where the young person is scheduled to live following their release (in the case of boys, this is usually under a guardian). In this way we try to improve their living environment, which can become a factor in prompting delinquency.

#### Probation Following Parole

When a young person's results at a correctional facility rise to the top rank, and other conditions including the establishment of a suitable environment at the scheduled living place capable of accommodating them following their release, the young person is given parole and placed on probation for a period. During this probationary period, attempts are made to realize some form of organic cooperation between their corrective education and environmental adjustment, and private volunteer rehabilitation workers meet with the young person every month to conduct living guidance, vocational training, etc.

This approach to probation realizes fairly positive results so that approximately 70% of juvenile offenders who have been involved in criminal cases (including traffic offenses) are eventually released from probation. However, similar to the reformatory situation, the probation system is burdened by problems such as probation officer case overload, ageing of rehabilitation workers, etc.

東京工業大学 保護管理センター 教授  
影山 任佐



青少年による重大犯罪が世間を騒がし、現代の若者の心理や行動がわかりにくい世の中になってきているようです。近年の「自己確認型」ともいうべき犯罪の基盤には、過剰なモノと情報に溢れた現代における「空虚な自己」、「幼児的万能感」等が関与していると言えます。犯罪には至らなくても「自己の病理」として「生活ソフト欠乏症」等が挙げられます。これらの解決にはまず、「身体的自己」の復権、つまり、自然

や動物との触れ合いの体験を通じて等身大の現実の自己を日常生活の中で確認していくことが大切だと考えます。

中でも「ペット療法」は重要な位置を占めてくるでしょう。なによりも生命についての感覚的ずれが、青少年の凶悪犯罪などの様々な負の社会現象として現れている昨今、ペットの世話で“心”を育てることが現代文明の根本的欠陥の補正作用を担っているのです。

Professor of Neuro-Psychiatric Science,  
Tokyo Institute of Technology

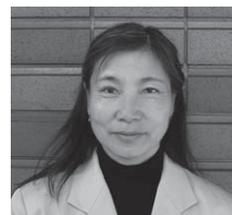
KAGEYAMA Jinsuke

In recent times we have seen some unprecedented criminal acts committed by young people in our society. Indeed, these days it is becoming increasingly difficult to understand the mindset and behavior of our younger generations. We must understand the basis that these are crimes of 'self-validation' or 'self-affirmation' suggesting perpetrators have an 'egopathy' or 'empty self' with a 'primitive, child-like need to validate their own power', as caused by, or a reaction to, the over-whelming materialism and information excess of our times. This reaction may not always result in criminal behavior but, as a symptom of the 'pathology of self', there is clearly a 'deficiency in the software for living or being'. In order to solve

this problem, it is necessary to recover the 'bodily self'. In other words, through contact with Nature and animals, it is important to re-connect with our sense of a real self that is part of the living environment.

As well as several other factors, 'Pet Therapy' has a very important role here. Perhaps more than anything else, recent times have revealed the increasing aberration in our natural connection with living beings, as evidenced by various negative social phenomena including some appalling juvenile crime. Fostering the 'heart' through pet care is one form of corrective action that can combat this fundamental deficiency within modern civilization.

社団法人 日本動物福祉協会 獣医師調査員  
山口 千津子



人間はあらゆる場面で、あらゆる目的で動物を使用・利用しています。その中には、食べるため・働かせるため・障害者の補助のためから、教育目的・研究のため、エンターテインメントのため等など、いろいろありますが、ペットやコンパニオン・アニマルとして人と共に暮らすことも含まれております。動物と付き合うことで、人間が様々な恩恵を受けることは、すでにたくさんある事例、研究があり、そして何よりも、家族・仲間として共に暮らしている人々には身を持って判っていることと思います。その良い例がこのプロジェクト・プーチではないでしょうか。窃盗・暴行・殺人などを犯し、社会からはみ出した若い男性と、飼主から虐待されたり、捨てられたりした犬たち。親から虐待されたり、捨てられたりしたような過去を持つもの同士が、お互い心を開き、信頼し合うようになり、犬の世話・トレーニングをすることで自身の存在感を見出し、責任をしっかりと果たせるようになって出院後の再犯率がゼロというのはたいへん素晴らしいことです。犬たちが温かい家庭に迎え入れられて幸せな第

2の犬生を送っていることも私たちにうれしきことであり、ほっと胸をなでおろすことなのです。しかし、このような活動はプロジェクト・プーチのように、しっかりとした指導者のもとで、犬の心身の健康管理・快適環境の整備・犬に負担をかけないトレーニング・犬に多大なストレスを与えない配慮、犬のその後の犬生にも責任を持つような、動物の福祉と幸福が十分に確保されているときにのみ、認められることとなります。いま、様々なところでアニマル・セラピー、障害者の補助、学校飼育動物等、動物を使って人間を助けよう・教育の一助にしようという活動がなされているわけですが、活動の目的がまずありきで、そのために動物が受ける生理的・心理的苦痛には目も向けません。動物の今のことは見ても先行きのことまでは考えていないという事態も起こってきております。

私たちは、動物たちがかれらの生涯のステージにおいて、その福祉と幸福が最大限に確保されているときにのみ動物たちを使用することが認められると思っております。

Veterinary Inspector of Japan Animal Welfare Society  
YAMAGUCHI Chizuko

Humans make use of animals in many various ways. Among other roles, animals provide us with food, help us in our work, serve our research needs, cover for our disabilities, entertain us and even help in our education. These roles also include the function that animals serve as pets or companions. A great deal of research already shows that interaction and communication with animals benefits people in many ways. People who keep animals already know this to be a truism. Project Pooch exemplifies this perfectly.

Young criminals convicted of serious offences (including theft, rape - even murder) can relate to animals that have been mistreated or abandoned by their owners. In other words, men and dogs with similar backgrounds of neglect are capable of a mutual trust and opening up their feelings. By caring and training for their dogs, these people can appreciate the value of existence and develop a sense of responsibility. The most exciting aspect of this Project is that the recurrence of criminal activity by offenders after they have left the institution is zero. It is also pleasing to know that the dogs themselves also gain a happy new life

after leaving the institution and end up with kind owners in warm homes.

However this kind of project is only possible (and should only be allowed) under the following criteria; namely, that the welfare and happiness of the animals (in terms of good mental and physical care) is guaranteed, that the environment is ideal, that the associated training is non-stressful, and that the dogs are treated with responsibility and consideration. Nowadays, there are even more activities in which animals help people, such as animal therapy, assistant dogs, and school animals. However, too much emphasis seems to be placed on the end gains for the human recipient at the expense of the physiological and psychological wellbeing of the animals. Furthermore, there are examples in which only the animal's immediate needs are considered, with no thought for the future.

We believe that use of animals should only be permitted in such roles after their optimal welfare needs and happiness have been assured, an assurance that should also cover their full life span.

## 座長

ペット研究会「互」主宰

山崎 恵子



最近、子どもの教育における動物の役割がかなりクローズアップされているようであるが、飼育方法、指導方法、接触方法等々実際の動物との関係づくりがどのように行なわれるかによって違いが出てくることに対する認識が極めて希薄であるように思われる。ペットを飼わせれば良い、触れ合い活動に参加させれば良い、学校動物を置いておけば良い、と言うことでは決してないのである。子どもの動物に対する態度はまず周囲の大人達のそれによって形成されてしまうのである。身近な大人達が動物の世話は面倒だと思ったり、動物の苦しむ姿に無関心であったり、さらには動物を乱暴に扱ったりしたら、子どもは決してそこから有益な学習をすることはないのである。

今回は青少年の健全育成のために犬のトレーニング

体験を用いるプログラムの成果が報告されるがこのようなシステムをすぐに取り入れようとする方々に対して一つだけ警告しておかなければならぬことがある。それはどのようなトレーニング方法を用いるか、ということがプログラム成功の鍵となっている、という点である。「力」をもって生きようとする青年達に非暴力的問題解決能力を身につけさせるためには犬を力ではなく「説得」でうごかす手段を教えるべきである。それがどのような方法であるかを知りたい方々は動物行動学と陽性強化法を用いたトレーニングをまず勉強されるべきであろう。それなくしては青少年を対象としたこのようなプログラムを実施する意味がなくなってしまうのである。

Chairperson

Companion Animal Study Group “GO”

YAMAZAKI Keiko

Society has recently begun to focus more and more on the valuable role of animals in the education of children. However, not enough attention has been given to the fact that there are different results depending on the nature of how the actual child-animal relationship is taught whether through caring for animals, or the actual methods involved in teaching and interactions. Allowing children to keep pets, to join in activities involving animals, or to have animals at schools, can never be enough. A child's behavior towards animals is primarily influenced by the adults around the child. If an adult believes that looking after an animal is a nuisance, is incapable of feeling for an animal that is suffering, or handles an animal roughly, a child will never gain anything positive from that influence.

In this symposium, some great results from youth development programs that employ the dog training experience will be reported. However, I must state a word of warning to anyone who would like to employ such a program. The key to the success of the program is very much determined by the type of training method used. In order for young people who have experienced a violent upbringing to gain any ability to learn non-violent problem-solving skills, they must first be taught how to influence dogs by coaxing instead of by force. Those who would wish to understand such methods should first study animal behavior and training methods employing positive reinforcement. Without that commitment, it will be meaningless to conduct such youth development oriented programs.

## 謝辞

NPO 法人 Knots 代表  
富永 佳与子



中学2年生の時、下校途中の小学6年生の女の子が校区内で殺されました。警察が毎日のように学校に来て、先生方は憤慨していました。犯人は同じ中学の3年生の男子。彼は同級生のお兄さんの友人で、彼が捕まった日、お兄さんは、「やっぱり・・・」とつぶやいたそうです。彼は何処かの更生施設へ送られてしまい、次に私が彼のことを耳にした時には、彼は女子高校生を殺していました。神戸や私の故郷・長崎で起こる子ども達の悲しい事件。その度に、あの事件を思い出します。プロジェクト・プーチは、あの当時子どもながらの無力感に希望の光を与えてくれるものでした。少年達と犬達が助け合えるという画期的なものです。事件が起こってしまえば、被害者も加害者も周囲の人達も、本当に悲しく辛いことになってしまいます。『起こさないために』何が出来るのでしょうか。私の祖父も、保護司をさせて頂いておりましたが、そういった方々だけでなく、普通の人達が『自分達に何が出来るか』に、もっと関心を持ち続けるということが肝心だと思います。様々な専門

知識を集め、人道的な方策を提案する— Kobe Humane Knots Center —のような場が、急速に必要なようになってきているように感じます。動物の存在がかつて無いほど身近な今、人の福祉と動物の福祉を繋げて考えていくことにより、心豊かな暮らしやすい社会が創造されていくのではないのでしょうか。最後になりましたが、『りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム』も4回目を迎え、今年も沢山の皆様のご尽力により無事開催することが出来ました。ご支援、ご協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。特別協賛としてサポートを続けて下さるネスレピュリナペットケア株式会社、ご協賛のアサヒビール株式会社及び株式会社カワイ音響システム、継続して助成を下さっている中内力コンベンション振興財団への深い感謝の気持ちを皆様方とも共有したいと存じます。このような企業活動が、未来の社会創造に寄与していることを忘れることはできません。

Representative, NPO Knots  
TOMINAGA Kayoko

When I was a student in the second grade at junior high school, a girl in the sixth grade at an elementary school in the same school district was killed while making her way home from school. At around that time, the police visited our school day after day and I remember that many of the teachers resented their presence. The perpetrator of the crime was a boy who was in the third grade of my junior high school. This boy was a friend of the elder brother of one of my classmates, and after he was arrested I heard that the elder brother had muttered "Just as we expected". The offender was sent to a rehabilitation facility, and the next time I heard about him was when he killed a female high school student.

More recently, other sad incidents involving children killing children have occurred in Kobe and in my hometown of Nagasaki. Each time I hear of such a tragedy, my mind goes back to the incident that occurred when I was in junior high school. Back then, Project Pooch was a project that gave me a flash of hope at a time when although I was still a child I felt a sense of helplessness. It is an epoch-making project in which young people and dogs are able to help each other.

Once a tragic incident of this kind occurs, the victim, the offender and all the surrounding people are locked in the grip of an extremely sad and painful situation. What can we do "to prevent such incidents from happening"? My grandfather

used to work as a rehabilitation worker, but the most important thing is that not only those who are in positions of dealing with offenders but the rest of us as well take a greater interest in the question of "what can we do?" I feel strongly that there is a rapidly increasing need for places like the Kobe Humane Knots Center, which accumulates diverse strands of expert knowledge and proposes humane measures. Also, today, with so many more people living in close contact with other animals than in the past, I think that a rich spirit and a society in which it is easier for people to live can be created by focusing our attention on linking the issues of human welfare and animal welfare.

Finally, thanks to the efforts of so many people, we have been able this year to host the fourth annual Live Love Animals International Symposium. I would like to give my sincere and hearty thanks to all the many people whose support has helped to make possible this endeavor. In particular, I'd like to extend my deep appreciation to Nestlé Purina PetCare which has continued to help us with the symposium as a special supporter, to Asahi Breweries Ltd. and Kawai Acoustic System Co., Ltd. for their excellent support, and to Tsutomu Nakauchi Foundation, which has given us continuous aid. We should never forget that corporate activities of this kind are making a valuable contribution to the future development of society.



神戸 21 世紀・復興記念事業継続事業  
りぶ・らぶ・あにまるず 国際シンポジウム 2004  
『子ども達と動物達を救うために～犬と歩む更生の道』

記 録 集

日時 2004 年7月11日(日)13:00 - 16:30

場所 ポートピアホテル 本館地下 1 階「布引・北野の間」

## 冒頭スピーチ

富永 佳与子  
(NPO 法人 Knots 代表)



皆さん大変長らくお待たせ致しました。こんにちは。有り難うございます。私 NPO 法人 Knots の代表を致しております富永と申します。本日は、お忙しい中、らぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウムの方へお越し頂きまして、有り難うございます。このシンポジウムも 4 回目を迎えることになりました。皆様のご助力の賜と感謝致しております。私が長くご挨拶をさせて頂くのもお邪魔かと思いますが、私今回抄録に書かせて頂きましたようにこのシンポジウムに関しては格別な想いがございます。そういった中、皆さんにもこのジョアンさんのご経験を沢山勉強して、そしてまた素晴らしいご専門の先生方にも来て頂いておりますので、知識を深めてこれから先の皆さんの活動の糧にして頂ければと思います。

山崎 恵子  
(ペット研究会「互」主宰)



それではノッツの富永さんから引継いで、私、山崎と申しますが、今日つたない司会ではございますが、一日座長を勤めさせて頂きます。本日のシンポジウムの進め方でございますけれども、早速もう時間を無駄にしないように、進め方のご説明、それから講師の紹介をさせて頂きたいと思っております。進め方と致しましては、皆さんもう広報の中で既にご存知と思いますが、非常にアメリカで今有名になってまいりましたプロジェクト・ブーチ、すなわち少年院における犬のトレーニングを通じての更生という題目で、ジョアン・ドルトンさんに、まずそのプログラムのご紹介ということで話題提供、今日の基調講演をして頂きます。それからその後休息をとりまして、3 人の異なった分野の専門家のパネリストの先生方に、それぞれの話題提供をして頂いて、それからパネルディスカッションということに致します。当然皆様のお話の後で聞きたいこと、言いたいこと、沢山お集まりいただいた方々から、即座にお手を上げたい方がいらっしゃいますと思っておりますけれども、出来れば最後のパネルディスカッションの後で、質疑応答の時間を設けますので、そこでまとめて質疑応答をやらせて頂きたいと思っております。

それではまずプロジェクトブーチの代表、ジョアン・ドルトン先生をご紹介させて頂きます。既に外でも本も販売されておりますので、皆様すでにその本を読まれた方もおられると思いますが、シェルターの犬を保護し、そして譲渡される前につけ、トレーニング等を、少年任に入所している少年達がするという、簡単に申しますとそういったプログラムです。その驚

それでは、今回座長をお願いしております山崎恵子先生をご紹介したいと思います。

山崎先生どうぞお席の方へお願い致します。

皆さん、良くご存知だと思いますので、改めてご紹介するまでもなくペット研究会「互」を主催されまして沢山の学校でもお教えになっていらっしゃる、こういった人と動物の様々な関係におきましては、正に日本を代表されるエキスパートの方でいらっしゃいます。勿論語学もご堪能でいらっしゃいますので、このような国際シンポジウムの際には本当に私達助けて頂いております。それでは、早速マイクを山崎先生にお渡ししまして、シンポジウムの進行の方をお願いしたいと思います。

山崎先生よろしくお願い致します。

くべき成果に関して、ジョアン先生からご紹介して頂きたいと思っております。簡単にジョアン先生のご紹介をさせて頂きたいと思っておりますが、ジョアン先生は実は私、先程お話を致しまして、大変親しみを感じましたのは、私が師と仰ぐレオ・ビュースタット先生、若い学生さんはご存知かもしれませんが、アメリカの有名なデルタ協会の創設者の一人であられる方の大学、ワシントン州立大学のご出身で、かつ生前のレオ・ビュースタット先生と親しくお話をされていたということでございまして、私も実は、この人と動物の関係という勉強の道に進みかけたのは、レオ・ビュースタット先生のお導きによるものでございまして、大変僣越ながらジョアン先生に対し大変親しみを、僣越ながら感じた次第でございます。ジョアン先生はご出身は、ワシントン州立大学、これは皆様、特に学生さんなどご存知かもしれませんが、日本動物病院福祉協会の養成講座をやらせておられますテリーライアン先生のおられたワシントン州のプルマン、彼女は州立大学でもお仕事をなさっておられたので、そういった意味でもジョアン先生は日本に間接的に関係のある方かも知れません。学位はオレゴン州ポートランドでポートランドの州立大学で学位と博士号を共に取られておられます。またジョアン先生は少年院等の関係のお仕事につく前には、中央政府ワシントン DC の米国教育省にお勤めの経験も持たれておりますが、現在はプロジェクトブーチの常務取締役として、非行の可能性や問題を抱えた青少年に対して、こういったプログラムが最も効果的かということ伝えるプロジェクトチームを組み、日々そのようなお仕事に心血を注いでおられるということでございます。それではジョアン・ドルトン先生、どうぞよろしくお願い致します。

話題提供

## 『少年院でのドッグ・トレーニング』 ジョアン・ドルトン

プロジェクト・プーチ社 常務取締役



【スライド 1】

こんにちは。【スライド 1】

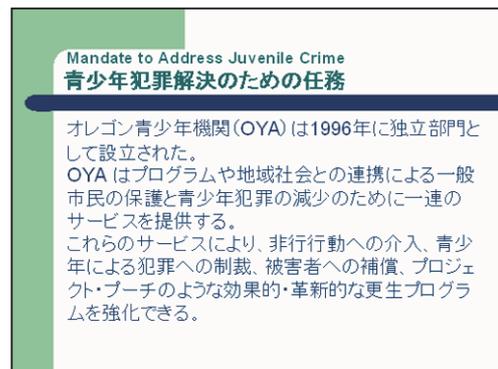
多くの方々に来て頂き、有り難うございます。遠方から来て頂いている方もいらっしゃると思います。せっかく来て頂いたのでいたのですから、私の話から何か学んで、そして今後のお仕事に役立てていただければと思っております。多くのスポンサーの方々、このようなシンポジウムを開催していただき、有り難うございます。特に感謝をしたい方がおります。ノッツのボールさん、ジェイミーさんに。彼等は本当に様々な計画を準備して下さいました。由美さん。彼女は、昨日素晴らしい通訳をして下さいました。昨日はお世話になりました。私は彼らに立って頂きたいと思います。そして彼らに皆さんからも拍手をお願いしたいと思います。(拍手) どうも有り難うございます。また今回、素晴らしいパネリストの皆様とご一緒出来ることを嬉しく思っております。皆様からのご質問にも、後からお答え出来るかと思っております。それでは、私の講演を始めさせていただきます。



【スライド 2】

プロジェクト・プーチ。プーチ【スライド 2】といますのは、Positive Opportunities-Obvious Change with Hounds「犬達と共に前進、変身」という意味で、1993年に当時高校の校長をしていた私は、これを設立しました。マクラレー

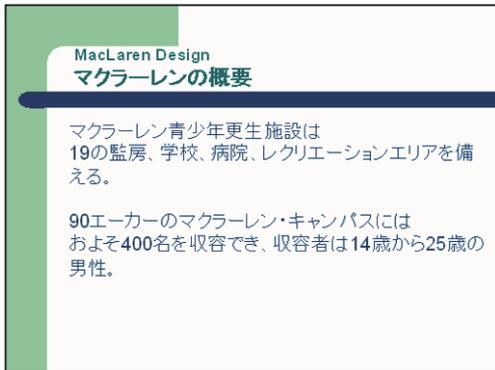
ンの少年院、ウッドバーン オレゴン州にある学校の校長をしておりました。この更生施設ですけれども、これはオレゴン州最大の町ポートランドと州都セーラムの間にありました。これは 100 年ばかり前からずっとありまして、そして本当に特別な私立の学校ではないかと思われるような雰囲気でありました。さて、皆さんにお見せしたいことがあります。オレゴン州でどういう青少年犯罪があるか、私達がこのプログラムを始めました時はこの地域は柵がありませんでした。しかしながら、一般市民を保護しなければならない、また、青少年の犯罪を減らさなければならないということで法が通過しました為に、この周囲には高い柵が立てられました。



【スライド 3】

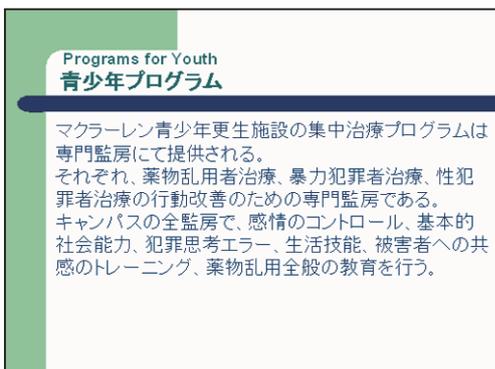
オレゴン青少年機関【スライド 3】というものは、このマクラレーン少年院を管理するところです。そして、特に強調しておりますのは、非行行動への介入です。更に青少年は犯罪の被害者に対して補償をしていかなければならないということです。そして、その為の任務としては効率的、効果的、革新的な更生プログラムが必要だということになりました。その例がプロジェクト・プーチなのです。1993 年我々はプロジェクト・プーチの青少年達をドッグ・シェルターに連れて行って犬を選ばせることが出来ました。しかしながら、州の新しい方針によりまして一般市民の安全を考えるとということで、青少年をシェルターに連れて行くことが出来なくなりました。そこで、シェルターの犬のビデオを撮りまして青少年院の少年達に渡しました。(そのビデオを見て) 子ども達が犬を選ぶというやり方で開始しております。

マクラレーンの概要【スライド 4】ですが、こちらには 19 の官房があります。また、それぞれが個室を持っている訳ではありません。一箇所に 25 人が住むという形になっております。そして高校があります。どのような収容少年であっても必ず高校教育は修了しなければならないということになって



【スライド 4】

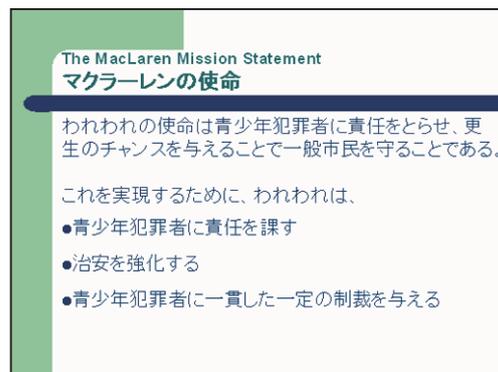
おります。もし、収監される前に高校が修了していなければ、ここで修了します。また、病院やレクリエーションの場もあります。若い男性のみです。キャンパスは約 90 エーカーの広さです。(約 365,832 m<sup>2</sup>、110858 坪、東京ドーム 7.8 個分) 今 14 歳から 25 歳まで 400 名が収容出来ます。多くの青少年は犯罪を犯して収容されました。そして、6 年間収容されている人達もおります。彼らは思春期をこの更生施設で送ることになります。最近のプロジェクト・プーチの研究結果が出ております。それはカリフォルニアの学生が行なったものです。その研究結果をまとめたものを持っておりますので、少しご紹介したいと思います。(ブック 21 ページ) マクラレーンに収容された青少年ですが、一番最近の調査によりますと次のような人種構成になっております。75.1%が白人、10%が黒人、9.6%がヒスパニック系、1.3%がネイティブアメリカン、そして、2.8%がアジア系ということです。さて特にここで彼らの障害の状態ですが、非常に重篤な感情障害があります。収容少年の 16.27%は感情障害を持っています。また、11.53%の子ども達は学習障害を持っています。さて、この生徒達ですが、オレゴン青少年機関に収容された青少年の 70%は個別教育プランというものを経験したあるいは経験しております。この個別教育プランを IEP (Individual Education Plan) としております。これは一定のプログラムを通してこういった子ども達が学習障害あるいは感情障害を改善する為のものであります。この青少年は長く非行犯罪を犯して来ております。また、労働経験もほぼなく、あまり学校、勉強も好きではない、また、両親あるいは片親が重罪犯であり、20%以上は既に子ども



【スライド 5】

がいたりもします。また、大抵の場合は虐待、ネグレクトされた経験が子ども時代にあったということです。この青少年のプログラム【スライド 5】ですが、プロジェクト・プーチ以外にも若者は色々な治療プログラムを受けることが出来ます。例えば専門官房の中で専門の治療を行なうものがあります。それらは全て集中治療プログラム、特に薬物乱用者の治療がよく行なわれています。リサーチを通しましても、多くの青少年犯罪は、午後の 3 時から 6 時の間で一番よく起こっているということです。この 3 時間の時間帯といいますのは、若者が学校から家に帰る、大人の監督がない時間帯です。そこで、薬物、お酒等を試してみる、友人も来る、しかし監督はありません。その次のステップとしてどうしても犯罪などに走ってしまう、そうすると収容されることになります。また、暴力犯罪者、性犯罪者の行動改善の為の治療も行なっています。全官房で感情のコントロールを行なっています。多くの少年達は、怒りの感情を長年内部に持っていました。そこで、それを上手くコントロール出来るように、また、より効果的にその怒りをコントロール出来るようになる為に行なっています。基本的に社会能力を持たせるようにあるいは、犯罪思考のエラー、生活の技能、どういう風に自分でアパートに住んで生活していくかという基本的な技能も教えます。後でビデオに出てくる若者の一人ですが、彼は少年院を訪問してきて収容されている青少年に、「歯みがきを買うのにとでもお金がかかる。トイレトペーパーも高い。こんなことは信じられなかった。収容されている時は当然だと思ったけれど、しかし、今一人で住んでいるので、自分でちゃんとお金の管理をしなければならぬ。」と言っておりました。

また、薬物乱用全般の教育も行なっております。犬などを使ったプログラムもありまして、思いやりの心を育てることもしています。



【スライド 6】

マクラレーンの使命【スライド 6】は、青少年の犯罪者に責任を取らせて更生のチャンスを与える、それによって一般市民を守ることです。そして、これを実現する為に我々は青少年犯罪者にも責任を課しております。自分達の行動、その結果として収容されてしまったということを自覚しなければなりません。更に治安を強化して一般市民の治安を

我々はしっかりと守っていかなければなりません。また、青少年犯罪者には一貫した一定の制裁を与えるということです。即ち一定の権利は失われます。多くの若者は結局責任を取って収容されたわけです。例えば器物破壊を行ったり、あるいは親が決めた門限を守らないということで、家でも制裁されます。そのようなことが、マクラレンでも行なわれています。決まりを守らなかったら一定の制裁は加えられるということです。そのようにして、あらゆる行動あるいは行いには、それなりの結果が伴うということ知らさなければならぬと考えています。青少年達がスタッフに対して口ごたえすることがあります。そして、成長過程に父親がいないというケースが多かったと思います。そこで、権威のある大人に対する対処の仕方を知りません。女性とはなかなかうまくいくことがあります。と言いますのは、母親だけに育てられた家庭の子が多いからです。他の若者と喧嘩等をした時、青少年はそのような争いをどういう風に処理するか、そこからどうやって対処してくかを学ばなければなりません。

**MacLaren Mission Continued  
マクラレンの使命 (続き)**

- 犯罪被害者関係者へのサポート
- 総合的な青少年更生プログラムの提供
- 家族の参加と責任の奨励
- 適任で多種多様な人材を選出し、訓練し、サポートして、自信付けを行う

【スライド 7】

また、マクラレンにおきましては、犯罪の被害者、関係者へのサポートも行なっています。【スライド 7】被害者は例えば収容者が保護観察に出されたことを知らされます。また、それらの治療に関しましても色々な異なったレベルできちんとフォローしております。更生プログラムでうまくやっている、あるいはうまくいかない日もある、そうしますとうまくいかないと色々と制裁を加えられてまたもう一度やり直すということです。出来るだけ家族の参加、責任を奨励しています。先程も言いましたように多くの青少年の親は、親としての技術を身につけていなかった為に肉体的あるいは言葉を使って虐待してしまうことが多い、そしてその後収容された青少年が家に帰って来た時どうするかその時は親がもう少し子どもに上手に対処して欲しいと願っております。そこで、各官房には、Family Day というものがあります。家族の日というのが大抵夏にありまして、家族がやって来ます。食事が用意されていたりして、また、日曜日に家族が訪問することも可能です。犯罪の種類によっては、家族が訪問出来ない場合もあります。そこで、そういう青少年達は家族がいる他の若者達と一緒に過ごしたりします。さて、我々は適任で多

種多様な人材を選び出して訓練し、そしてサポートして自信をつけてもらおうと思っております。我々は青少年に色々なことを学んで欲しいと思うからです。収容所から出て、働いて労働者として何をするか色々な技術を持たなければなりません。その為にも例えばスペイン系の雇用主とどういう風に対処するか、我々の地域にはスペイン語圏から人が多く来ていますので、スペイン語で適切な会話が出来るように教えております。実際に犬にスペイン語を使ってトレーニングをしている、そういう青少年が我々のところにおります。

**The Project POOCH Mission  
プロジェクト・プーチの使命**

プロジェクト・プーチは更生中の青少年が、責任能力と生産能力のある地域社会の一員となるために必要な人格的、職業技能を身につける機会を与える。本プログラムは、保護施設の犬を里親に出せるよう、青少年に犬の世話や訓練技術を教えることにより、これを達成した。

【スライド 8】

それでは、プロジェクト・プーチの使命【スライド 8】についてお話してみたいと思います。マクラレンの使命についてお話しました。そして、プロジェクト・プーチの使命もその中では非常に大切です。マクラレンの使命と共通するものが非常に多いです。1993年に私はプロジェクト・プーチをスタート致しました。そして、1999年に非営利のプロジェクトにしました。今、7人の理事がおります。彼等らがこのプロジェクトの使命を作って下って、またプログラムをサポートして下さい。その理事会には獣医師がいたり、あるいは、地域社会からサポートして下さいの方が参加しております。また、収容されている生徒からも意見が出されます。勿論、彼等はそのような会議に参加出来ません。そこで、私が彼等の意見を吸収して会議に参加します。プロジェクト・プーチは、更生中の青少年が責任能力と生産能力のある地域社会の一員となる為必要な人格的あるいは職業機能を身につける機会です。例えば犬小屋を作るお手伝いをします。そうしますとある程度物を作る、建設をする技術が身につきます。実際地域社会で建設を専門とする人達が手伝ってくれます。セメントで壁を作り塀を作るにはどうするかを学びます。そうやって犬舎に責任を持つ、犬のトレーニングだけではなく犬舎の作り方も学ぶという職業訓練にもなります。工具の扱いもここで慣れることとなります。例えばハンマーの使い方が分からない子ども達も多いわけです。ですから、プロジェクト・プーチがあると言うのは、非常にラッキーだと思います。沢山の工具の扱いに慣れることが出来ます。犬舎を作って修理するだけでなく犬のグルーミングも出来ます。ハサミやクリッパーを使い犬のシェービングを行なったりします。こういうこともいつ

もやっております。10年間の間に恐らくこれで失ったものは何もないと思っております。このプロジェクト・プーチは、我々にとって非常に役に立っているものだと思っております。それでは、リサーチの結果27ページのところを少しご紹介していきたいと思っております。青少年はこのプロジェクト・プーチで一生懸命やることを求められます。そして、次のようなことに同意して契約書に署名しなければなりません。何を契約するかといいますと、学生は他の生徒と協力してグループで働く、そして犬から学ぶ、犬について学ぶそして、トレーニングすることを学ぶということです。また、生徒達はどんな天気でも汚れを気にせず適切な服装で犬と共に過ごす、例えば我々の監督者はノースリーブのシャツではいけないと言います。刺青をしている若者がいますから、ノースリーブのシャツでキャンパスを犬を連れて散歩すると一般の人達のイメージがよくなります。また、このプロジェクトに参加する生徒達は犬をきちんと世話したいという強い希望を持つだけでなく、犬を綺麗にグルーミングしてトレーニングをしてやる必要があります。そして、犬と絆を強めて多くの時間を共に覚悟が必要です。犬に対して手荒な扱いや虐待はだめです。そういうことは許されません。また、生徒達がもし犬に悪い行動をさせようとする、例えば、自分の口に餌を入れてそれを犬に飛びついて食べさせようとする、といったことを我々はだめだと言います。結局犬はそういうことを悪い癖として身に付けてしまいます。新しい飼い主の所に行っても飛びついて餌を取るといったことをやっては困る訳です。子どもがいる家庭かも知れませんが、また、咬んだり攻撃をするように仕向けるような若者達は、プロジェクト・プーチから除外されます。しかしながら、多くの犬、参加する青少年達は自分達が虐待を受けた経験を持っております。だから、我々もここには注意します。スタッフの指示に従わなければなりません。そして、犬舎では生徒の中にも監督的立場の人達がいます。その人達の言うことをちゃんと聞いて一緒に仕事をしなさいと言っています。また、適切な言葉使いをしなくてはなりません。私が初めてこの更生施設の仕事をした時、女性はあまり多く仕事をしておりませんでした。そして、若い男の子達が使う言葉は適切な言葉でないものが多かったのを、それを変えてきました。不適切な言葉使いをした場合は後できちんと話をして改善するようにと言います。それでも、もし直らなければプロジェクト・プーチの参加は認めないと言います。また、プロジェクト・プーチに参加した生徒達は一般の人達とも交流します。一般の人達が犬を見に来ます。また、このプログラムがどんなものか見たいと来る場合もあります。ですから、適切な社会能力が必要なのです。多くの生徒達は社会能力をあまり持っておりません。更生施設に来るまで社会に対応する能力がほぼない生徒もいました。

そして、若者達にどんな考えを持っているかを聞きます。

例えば犬を選ぶ時、青少年を選ぶ時そういう時にもアイデアを聞きます。我々は出来るだけ彼等にどのように環境を変えていくべきか改善はどのようにしていくか、意見を聞きます。彼等にはただ単に文句を言うだけでなく、創造的な考えというものもどんどん出してもらうようにしています。そこで、問題解決のスキルを学ぶことが出来ます。

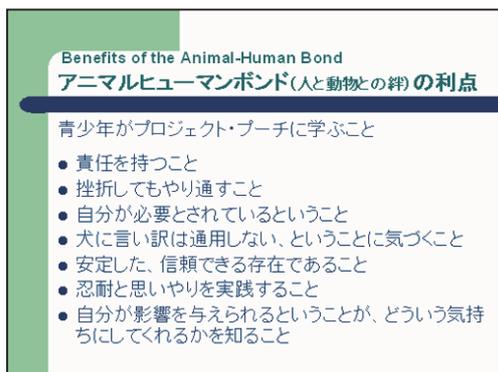
彼等は犬同士に相性があることも知りません。犬同士でもあまり合わない犬がいます。こういった犬同士は犬舎を並べることが出来ません。例えばそういった時にどういう風に問題を解決すれば良いか聞きます。彼等にはまず解決方法が分かりません。彼等は今までそういった問題の解決の為に適切な指示を得られていなかったのです。問題解決のプロセスは非常に重要です。彼等が問題解決をする十分な練習時間を与えられていれば、ただ単に問題解決の技能だけを身に付けるのではなく、自分達の学習能力に対しての自信が得られるとそれと同時に後の人生においても問題を解決していく能力を構築することが出来るのだということです。まさに学んでいる内に彼らはどのように学習するかを学んでいくことが出来るということなのです。そして、犬から彼等は学ぶことが出来、犬も彼等から学ぶことが出来るということなのです。非常に循環が良い、互いに学ぶことが出来るということなのです。

プロジェクト・プーチに参加したいということであれば、青少年は申請書に記入して申請をします。そうしますと委員会がありまして、そこで面接を受けることとなります。どうしてかと言いますと、アメリカでの多くの企業では将来従業員になる為には、面接を受けなければなりません。彼等にとってもどのような質問にどのように答えるかということも学んで頂きたいのです。勿論、差別的な質問はすべきではありません。これは法律に反しています。彼等の多くは、私よりもお互いのことを良く知っているの、彼等に面接官の役割をしてもらうこともあります。そして面接官を行う彼等こそが即ち、意思決定をする上での最初のレベルであると、新しい生徒さんがプロジェクトに入ってくる上で面接官をしてもらうのも青少年ということになり彼らが最初に面接を受ける人達に会う人達ということになります。それによって記録を使います。例えば、動物虐待の経験があるかどうか、過去があるかどうか調べなければなりません。それから、トリートメントマネージャーの方から十分に例えば感情のコントロールであるとか、薬物乱用であるとか、そういったものに対しての記録もつけなければなりません。プロジェクト・プーチにおいては、犬から学んで頂きたいのです。しかしながら、勿論プーチの基準も守らなければなりません。例えば動物虐待の経験がある青少年は、我々の基準には達していないのです。ですから、それは避けなければなりません。それから、プロジェクト・プーチでは、マクラーレンの生徒を地元のシェルターの犬とペアを組ませます。【スライド9】これは私自身が行いました。私自身も何らかのプログラムの成功を



【スライド 9】

求めていましたので、アンソニーという青少年をアシスタントとして、少年と犬との組み合わせを7年間手伝ってもらいました。彼はある若者を殺したために収容されました。ある若者がアンソニーの犬を殺した為にアンソニーはその若者を殺してしまったからです。ですから、彼は犬が好きなんだということが、私には事前に分かっていました。彼はプログラムのアシスタントとして、初めて選んだ少年です。今、彼は特別な専門知識を持って動物病院で仕事をしてくれています。彼は大変努力家で優秀な青年です。今は、放射線の方の勉強もしているようです。



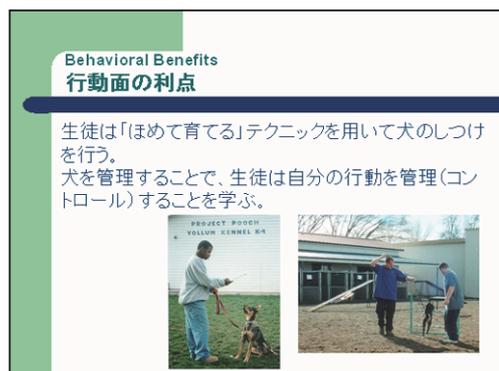
【スライド 10】

さて、人間と動物の絆の利点【スライド 10】は何かということを見ていきたいと思えます。ここで最も難しいことは責任を持つということでしょう。このプログラムを始めました時、皮製のリードを噛む犬が沢山いました。噛んでリードを新しく取り替えていると非常にお金がかかってしまいます。今度のリードは必ずロープを使うようにしないと、もうリードを買うお金はないからねと子ども達に伝えました。

これも責任の一つです。自分達の所有のリードを使わせることによって、彼等に責任を持たせるということになります。例えば、お母さんがいつも子ども達の部屋を掃除してあげるのではなく、子ども達にも掃除をさせるという責任を持たせなければなりません。我々は必ず、マクラーレンに来る前にどのように自分達の部屋に対して責任を持っていたかを聞きます。これは面接の時に聞かれると非常に変な質問だなと思うかも知れませんが、どのように責任を持って自分の部屋を管理していたかということも非常に重要なのです。

それから、挫折してもやり通すということです。時には他の犬よりトレーニングが長くかかってしまう犬もいます。ここで申し上げなければならないのは、絶対必要なところですが、トレーニングをしていく上で必ず挫折することもあります。そういった時でもやり通さなければなりません。非暴力的に非常に優しい形で教えていかなければならない。犬というのは、人間と同じように扱わなければならないということなのです。犬はすぐに、新しい家庭に貰われて行く訳ではありません。必ず、飼い主探しがいかにうまくいく訳ではありません。これは犬でも猫でも同じことなのです。

それから、勿論、犬に言い訳は通用しないということです。犬は例えば、「私は寝たいからもうあなたの世話は出来ないよ。」という言い訳には犬は理解してくれないでしょう。犬に対して言い訳をしてはいけません。必ず犬の世話はしなければならない、そうすることによって犬は愛してくれるということなのです。それから、安定した信頼出来る存在であること、これも重要なことです。特に収容された青少年にとっては必要です。信頼出来る存在ということ、何かするといっても現れなかったりしては、やはり失望してしまうでしょう。家族が絶対訪れるよ、と言って青少年の方は着替えて綺麗な格好をして待っているという段階で家族がそこに現れなかったということだってあるのです。これでは、家に帰っても一貫性がないものだと思ってしまう。ですから、必ず犬と人間との関係も安定した信頼出来る存在であることが必要です。そして、忍耐と思いやりを実践すること、例えば青少年に対してこのプロジェクト・プーチから何を学んだかと聞きますと、忍耐を学んだという人が殆どです。犬の中には非常にトレーニングが難しい犬、思っているようにトレーニングを受けてくれない犬もいました。「どうでしたか?思いやりをもってトレーニングしましたか?」と聞きますと「そうです。」と彼等は言います。それから、自分が影響を与えることが出来たということがどれだけ素晴らしいことかを知ることになります。例えば、ドナーに対してメモを書きます。一つのことに焦点を当てて何か向上、改善が見られたということであれば、そこにマーキングをします。そうすることによって、まさに自分が教えることが出来た、トレーニングが出来た、自分が影響を与えたということが分



【スライド 11】

かります。勿論、この記録ドッグファイルのコピーを彼等は貰うことが出来ます。それから、行動面での利点を見てみましょう。さて、ここで我々がどんなトレーニングをしているかお話ししたいと思います。【スライド 11】プログラムを始めた時トレーナーを雇用する十分な資金がありませんでした。そこで、何年間もトレーニング経験のある女性が来てくれました。そして、何週間か経ってから、他の方も来てくれました。これは非常に生徒にとって混乱を招いてしまいました。何故かというところ、チョークチェーン（金属製で首が絞まるタイプの首輪）を使っている場合があったのです。これは人間の社会では、人間に対してチョークチェーンを着けるというようなことは許されないとされています。ところが、トレーナーの中には「私にはこれが必要なのです。プロジェクト・プーチでこういう物を着けたいんです。」という人もおりました。でも、私はトレーナーに我々は成長段階で犬が無駄吠えをする原因の一つはこのチョークチェーンだと言いました。我々は非常に高い標準のトレーナーを持っていると言えます。アメリカにペットドッグトレーナー協会というのがあります。そして、多くの人々が犬をトレーニングする上で人道的な基準に対して合致しなければならないというのが、その協会のコンセプトです。我々のところではそれを実践しているということになります。そして、実際何年間かの人道的な方法を実践している人だけをトレーナーとして受け入れています。ビデオを撮ってフィードバックもしています。それから、非常に広範なテストなど（実技を含む）もパスしなければなりません。トレーナーはこのような実技のテスト、読み書きのテスト等も含めて高いスタンダードを達成しなければプロジェクト・プーチのトレーナーにはなれません。行動面の利点ですが、例えば、トレーナーの中には犬に対してチョークチェーンを使いたいという人がいますが、これは、人道的ではないということ、それから、更生施設では適切ではないということを行います。それから、研究結果の 81 ページを見ていききたいと思います。プーチの参加者と非参加者の間の何らかの行動面での違いについて、研究しました結果ですが、プーチの参加者は非参加者よりリーダーシップ及び問題解決の面で抜きん出ているというものであります。それから、プーチの参加者は権威に対して尊厳を持つようになった、あるいは監督に対して敬意を持つようになった、これはプーチに参加していない青少年に比べて抜きん出ているところです。青少年の中には、短期的に収容されている者もいますし、長期的に収容されている者もいます。

我々はプロジェクト・プーチの参加取りやめを強制していません。しかしプロジェクト・プーチを辞めたいということであれば、どうして辞めたいのか聞きます。すると理由の一つにあまりにも責任が重過ぎるんだと言う子もいました。勿論これは悲しいことかも知れません。

プロジェクト・プーチを辞退した子どもの中には、六歳の大変

幼い子どもがおりました。

彼のお母さんは彼に対して、実際に生き物の世話をすること責任がかかることなのよと言ったそうです。しかし彼は最終的にプロジェクト・プーチに戻ることを決め、再度申請をしてそれは受理されました。

**Emotional Benefits**  
感情面の利点

生徒と犬の間のできる関係と相互信頼は、プログラムの成功に極めて重要な軸となる。生徒の中には、この犬とのつながりが、無条件の愛を知る初めての体験となる者もいる。そして、それが将来人間関係を創りあげる為に必要な自信と希望を育てるのに役立つ。



【スライド 12】

さて、感情面での利点【スライド 12】ですが、「相互信頼」ということです。生徒と犬との間の相互信頼は、非常に重要です。これらの生徒さんは犬を信じていないからです。「犬と話は出来るのよ。」と私はよく言います。その課程の中で相互信頼を構築していきます。犬と話すということだけでも良いのです。生徒の中にはこの犬とのつながりが無条件の愛を知る初めての体験となる者もいます。犬は、どんな臭いであれ、どんな外見であれ全然気にしません。毎朝、その若者を見てどれだけ犬自身が幸せを感じているかということなのです。一緒に昼食をとりたかったら、とっても良いですよと言います。あるいは、音楽を一緒に聞いても良いわけです。しかしながら、いつも好きな時に犬に対して餌を与えてはいけなく、ということを行っています。勿論、これをしたい若者もおりますが、私はこれはしてはいけなくと言います。中には隠れてあげる人もいますが、これはいけなくと言っています。勿論、犬に餌をあげればいつも犬は欲しがりますよね。

それでは、ダンについてお話ししたいと思います。6組の里親を転々としている訳ですが、プロジェクト・プーチに参加しました。母親を探したのですが、見つかりませんでした。インターネットでも探そうとしたのです。というのは、母親は何回も結婚しているの、どこにいるか分からなかったのです。彼には訪問者が一人もいませんでした。そして、手紙も来ませんでした。彼はコロラドにあるボーディング・ケネル・アソシエーションが認定しているペットケアテクニシャン1及び2という二つのコースの通信教育のプログラムを受けていました。このコースは、動物に関して世話をすること全てが網羅されています。このテストに通過致しますと証明書がもらえるというものです。ダンは今全く今まで郵便を受け取ったことも無いということで、ボーディング・ケネル・アソシエーションの方に彼へ直接証明書を送ってもらうように言いました。「ああ、郵便が来た。」ということで、「僕は今までそんなの貰った事ないし、

嘘じゃないの?」と彼は言いました。彼はその手紙を見てどれだけ喜んだことでしょう。彼は官房の中に全ての犬の写真飾っているくらいです。写真のアルバム、その横の壁に証明書も飾っています。それから、ある場合にはバックヤードブリーダーと呼ばれるんですけどもダルメシアンであるとか、非常に有名な犬がおりますよね。こういった犬を親の方はブリーダーとしてお金を稼ぐ為だけに育てると言ったことがあります。ホームレスの動物がシェルターに送られて来るということで、今まで決して恵まれた家庭に行った事がないという犬がいるわけです。勿論我々はそういった純血種に対して反対している訳ではありませんけれども、成人であれ、青少年の更生施設の中ではシェルターからの犬、非常に難しい犬を世話すると言うことに意味がある訳です。即ちシェルターでは簡単な犬というのは意味が無いということになります。出来るだけ行動に問題がある犬を受け入れてこそ、意味があると、我々は誰も世話をしたくないような犬の世話をすることになるので。我々にとっても犬の新しい飼い主を探すのは難しいことです。親の中にはバックヤードブリーダー（純血種を子犬の時から育てて、それを売ること）をしている人もいて、こういった犬を更生施設で引き取って下さいという場合もあります。今までの対応としては、我々は決してバックヤードブリーダーから犬を引き取っていません。何故なら、そのような犬を買った場合に、青少年に対して、これは人生においてひきうけていかねばならないことなのよと説明しますと彼等は分かりましたと言って去って行くからです。（問題のない（素直な良い子）犬だけが、責任を持って世話をされていくことは、彼等に共感を抱かせないという意）

**Benefit of Work Experience**  
**職業経験面の利点**

生徒がプロジェクト・プーチで学んだ技能は、マクラレンを去った後以下のような雇用の機会につながる。

トリマー  
しつけインストラクター  
アジリティトレーナー  
ペットシッター  
ペットの預かり  
ペットショップ  
動物病院職員  
飼育管理

【スライド 13】

それから、獣医さんから犬を引き取ってくれないかと、例えば、こういったプログラムがあるなら良いのではないかと持ち込まれる訳ですが、その場合は、引き取るべきかどうかのテストをしています。後のビデオでもお見せしたいと思いますけれども、青少年にとってキャリア、即ち犬の世話をすることによってそのキャリアを構築することが出来る、例えばトリミングの仕事に就けるということもあります。いわゆる職業経験面での利点【スライド 13】です。しつけのインストラクターになることも出来ます。アジリティトレーナーになることも出来ま

す。これは非常に面白い仕事です。青少年に対して非常に刺激のあるわくわくするような仕事だと思います。犬も幸せです。そして健康面も保たれるということになります。それから、ドッグケア、これは、キャンパスでの先生の為のドッグケアもある訳ですけどもデイケアということですよ。仕事をしている先生の為のドッグケアサービス等もそういった仕事の中にあります。それから、ペットの預かりもそうです。限られていますけれども、このプログラムにお金を与えてくれるものです。それから、青少年はキャンパスで半時間位犬と散歩する訳です。非常に彼等にとっても楽しい時間であり、犬にとっても楽しい時であります。それから、ペットショップなどで働くといった職業もあるでしょう。かなりショップの方から我々はサポートを得ています。我々に資金を供給してくれたりもしています。先程申し上げましたように、犬舎管理ですけれども、アメリカンボーディングケネルを通して犬舎管理なども行なっています。ビデオを今からお見せ致しますけれどもオーシー・ジェysonは大体6ヶ月位プーチ・プログラムを受けている訳ですけども非常に成功しています。クリス、このもう一人の子どもですけれども青少年です。彼は一年以内に出院すると考えています。彼は既に農場で働くことが決まっています。青少年の中には他の州に家族が住んでいる場合があります。となりますと、家族の保護観察が出来ないということになります。クリスの場合は、カリフォルニアに行くことになったので、保護観察を更に厳密にされることとなります。ジェysonはユタにいます。ユタに行くこととなります。家族のところに帰ることは出来ないんです。と言いますのは、彼の父親が重罪犯であるということ、彼自身も自分で責任を持って人生を全うしなければならないのです。

**Research Results**  
**調査結果**

カリフォルニア州、ペバーダイ大学（サンタクララ）のサンドラ・メリアム・アータ博士は3年間プロジェクト・プーチを調査し以下の結果を見いだした。

マクラレンの成人スタッフからの調査回答によると、権威の尊重、社会交流、リーダーシップの面で著しい行動の改善が見受けられる。  
今日まで、プロジェクト・プーチの生徒の再犯はゼロである。

【スライド 14】

それから、最終的な調査結果【スライド 14】ですけれども全てのプロジェクト・プーチの生徒ですけれども再犯は今日までゼロということなんです。更に追加的なリサーチをしていきたいと思ひます。ソーシャルワーカーと共にリサーチをしていますけれども、プロジェクト・プーチで学んだことは実環境の中でそれを活かしていくことが出来るのかということですけども、これに対してのデータもこれから調査していきたいと思ひます。非常に重要だと思ひます。このリサーチを見ましてプ

プログラムを始める前に例えばこのプログラムは非常に労働集約型ですね。非常にお金もかかるということになります。勿論、我々の場合は獣医さんが助けてくれた、サポートが沢山あったということもあります。例えば予防接種に対してお金を全く請求しないもいたわけですので、我々としても勿論財団という形で寄付も受けておりました。そして、犬舎を少年院の敷地内に設置することも出来ました。そして、セキュリティの問題もかなり改善されたものでありました。犬舎に対してもこれは安全かどうかということはいつも監視されているということでもあります。そして、衛生面でも管理しておりました。これが全てのプロジェクトに当てはまるかどうか分かりませんが、これが正に我々プロジェクト・プーチの概要であります。

富永

以上を持ちましてジョアンさんのプレゼンテーションを一度終わらせて頂くことになると思います。皆様にご案内を前もってさせて頂きたいのですが、日本語のビデオということで日本語で放映されました番組の途中大変失礼なんですけれども一部企業のコマーシャルが入りますけれども、その点はちょっと皆様お見逃し願いたいと思います。それでは、ビデオの方をよろしくお願い致します。

(ビデオ放映開始)

テレビ東京『ペット大集合ポチタマ』より

ナレーター（以下N）：オレゴン州マクラレン少年院、14歳から25歳迄の犯罪を犯した若者達が入所しています。ゲートの向こうでは若者達が社会復帰の為に訓練や資格習得に日々励んでいます。朝早く若者達の一段がやって来ました。入っていったフェンスの中からは犬の鳴き声。シェルターと呼ばれる日本の保健所にあたる施設から引き取られてきた捨て犬達です。プロジェクト・プーチ、プーチとは犬という意味。トリマーやトレーナー等犬に関連した職業に就くべく若者達は犬達の面倒を見て仕事を覚えていくのです。3ヵ月ほどベアを組みマンツーマンで世話をします。捨て犬だった犬は人間との信頼関係を取り戻し、ペットとして引き取られていきます。これもプロジェクトの重要な役割の一つです。

1週間前にシェルターからやって来た犬がいました。エイミーです。捨てられたばかりだからでしょうか。まだ、人に慣れていません。担当はアダム・キャメロンさん、傷害事件を起こした若者です。

アダム：ここで訓練を積み、犬のことを学んでいこうと思っている。少年院を出た時このプロジェクト出身だとペットショップへの就職がとても有利になるんだよ。

N：犬舎の掃除に続き、朝8時には散歩へ。アダムといっしょに歩いていたエイミーが突然立ち止まりました。言う事を聞いてくれません。エイミーは人間不信になっているのでしょうか。中々心を開こうとしてくれません。全力投球のコミュニケーション。

アダム：犬の世話をしていると言う事を聞いてくれず我慢しなければならぬことが沢山ある。僕はここで忍耐を学んだよ。

N：やがて犬の方も人に対し少しずつ心を開いていきます。するとこれまで社会で誰も信じずに生きてきた多くの若者もまた変わっていくのだといいます。

アダム：犬と一緒にいる時間はとても楽しいよ。毎日の世話も苦にならない。好きだから集中して出来るんだ。

N：しつけ訓練は毎日およそ1時間に渡って行われます。きちんとしたしつけは新しい飼い主を探す上で欠かせないポイント。ベアを組んだ犬の将来の幸せの為に手は抜けません。去年1年間でここから、26匹もの犬達が新しい飼い主に引き取られていきました。

ドルトン氏：犬は若者に助けられ、同時に若者は犬に救われています。このプロジェクトは、人と犬がお互いに支え合っているんです。

N：マンツーマンで訓練した犬により良い飼い主さんが見つかるように飼い主募集の情報をホームページに打ち込んでいきます。社会にいた時は犬に見向きもしなかったであろう不良少年はここまで成長したのです。若者達は犬と接する技術と同時に優しい心を育んでいきます。

N：プロジェクトのOBがやって来ました。ジェイソン・ホルターさん。以前はギャング団に入り、喧嘩や盗みを繰り返した札付きの不良でした。今はペットショップで働いています。経験話を話してくれと呼ばれてきたのです。

ジェイソン：このプロジェクトのおかげで俺は今の店に勤めることができた。大事なのはやる気さ。君らも今持つてる情熱を大切にして頑張れば、仕事は手に入るはずだ。俺は出来るだけ早くドッグトレーナーになるつもりだ。

N：外の世界で生き生きと働く先輩の話は、若者達の心をとらえたようです。誰もが真剣に聞き入っていました。

N：ジェイソンが働くペットショップは少年院の隣町にあります。

今はドッグトレーナーの見習いとしてアルバイト扱い。自給は州の規定の最低にあたる7ドル。以前荒れていた頃のジェイソンを知る人には信じられない姿です。

ジェイソン：犬が好きなんだ。汚れたって平気さ。

ジェイソン：犬は俺の人生を変えた。あいつらは俺の子どものようであり、愛すべき存在なんだ。俺の気持ちを分かってくれる、俺の理解者なんだよ。今まで失いかけていた情熱を俺は犬からもらったんだ。

N：そんなジェイソンにはずっと心にひっかかっていることがあります。それは少年院で世話をした、パッチという犬のこと。

ジェイソン：パッチは耳が聞こえないんだ。でも賢い犬で、いつも俺と一緒にいたんだ。今でもよくパッチのことを思い出すよ。

N：パッチは現在オレゴン州の聾唖学校で、セラピー犬としてくらしています。耳が聞こえずしゃべることのできない若者達が寄宿生活を送る学校。

N：パッチがいました。子ども達みんなに慕われているようです。パッチも耳が聞こえませんが、かわりに命令のサインを覚えています。

先生：これが回れよ、回れ。これがお座り。

N：子ども達はうまくパッチとコミュニケーションをとることが出来るのでしょうか。見事です。ジェイソンが言っていた通りの賢い犬、完璧です。

N：子ども達にとって放課後パッチと遊ぶことはなよりの楽しみ。パッチが来て以来、子ども達は明るく活動的に変わったそうです。

先生：パッチにお座りや伏せ、待てのサインを覚えさせたのはジェイソンよ。だからパッチはここで子ども達ともすぐに仲良くなれたの。彼には感謝してるわ。

N：ジェイソンとパッチが別れたのは半年前。パッチは今も彼のことを覚えているのでしょうか。犬に囲まれて働きながら、ジェイソンのパッチへの思いは膨らむ一方です。

J：パッチにあいたいよ。世話をしたり、トレーニングをしていたりしていた時のことをよく思い出すんだ。俺はあの犬に救われたんだ。

N：聾唖学校の先生の計らいで、ジェイソンの希望がかなうことになりました。彼は保護観察中のため校舎に入ることは出来ませんが、入り口でパッチに会わせてくれるというのです。

N：来ました。半年ぶりに会うパッチです。

N：駆けだしました。そして全力疾走で懐かしい腕の中へ。辛い境遇から一緒に這い上がったパートナー。パッチだって忘れるわけがありません。

J：覚えていてくれたんだね、パッチ。ほんとに好きだよ。こいつが俺を救ってくれたんだ。

N：暗くすさんでいた元不良少年の心は、今穏やかです。これこそがプロジェクト・プーチの奇跡の成果なのではないでしょうか。

(ビデオ放映終了)

山崎：ジョアン先生有り難うございました。特に最後の感動的なビデオで非常にこの内容というものを皆さんよくお分かりになられたと思います。ただ非常に感動的なビデオですけれど、先程一番最初の頃に実践的なお話をなさっていた時にジョアン先生がやはり警告を発しておられたと思います。こういったプログラムというのはお金もかかるし、労力もかかる、また、トレーニング方法、要するに青少年の更生に役立つというものはAPDT、さきほど先生がおっしゃったAssociation of Pet Dog Trainersというペットドッグトレーナー協会、アメリカの大きな協会ですけれど、そういったところで推奨しているような陽性強化方法です。そういったことすべての要素がそろっていなければ出来ないプログラムだ、ということを実際にしっかりとご理解頂きたいと思います。もうとにかく青少年の教育には犬がいい、やろう!という風に思ってしまう人がフィーバーしているかも知れない。日本のアニマルセラピーもそうですけれど、走る傾向、動物に関して走る傾向というのに対して恐らくジョアン先生も警告を寄せられたのだと思いますが、皆さんもその点に関しては是非是非肝に銘じて今日のメッセージとして受け取って頂きたいという風に思います。再びジョアン先生に盛大な拍手をお願いします。Thank you very much Joan!

## パネラスピーチ

法務省 奈良保護観察所 所長  
青山 幸克



どうも、失礼致します。奈良保護観察所長の青山と申します。よろしく申し上げます。この動物セラピーということでプログラムをお受けするにあたってですね、全く私ははっきり申しましてこの動物セラピーということ、それまで耳にするものの全く接したこともなかったし、自信もありませんでしたので、はっきり言って辞退をさせて頂いていたのです。どうしてもということになってきたのはそこにおられる植村先生が保護司をされてるということで、保護司といいますのは地域で民間のボランティアとして非行少年等の更生指導にあたって、そんな方々を保護司と。日本には全国に保護司が大体4万8千人おります。その方々が保護観察所の保護観察官と一緒に保護観察にあっているということでございます。植村先生はあまり印象に残っておられるかどうか知りませんが、私も本当にちょっと鮮明な印象があるのですが、多分昭和57年であったと思いますが、母子家庭の暴走族の少年が、保護観察になってきまして、その時にお母さんと何回か私も面接してなかなか更生が難しいというふうなことがありました。だけど非常に植村先生のご指導等ありまして、結局保護観察が良好解除ということで、私もお母さんが母子家庭の中で本当に苦勞をされて良かったなという思いでございました。と言いますのも、私も実は4歳のときに父親が亡くなりまして、元祖中学浪人みたいなこともしました。そのようなことがありまして、特別に母子家庭のケースについては力を入れていたわけでございます。本当に良かったなと喜んでおりました時に、私がちょうど初任の課長で高知へ転勤致しました。その時に一通の手紙が参りまして、そのお母さんからです。先生本当にお世話になりました、有り難うございます。うちの息子も本当に更生して立ち直って市役所に就職して、良かったなと思っている矢先に交通事故で亡くなりました、ということがあったんでございます。私は早速植村先生に、このお母さんをどのように激励したらいいのかと、一人息子で、本当に立ち直って更生して、そういったその子のお母さんに対してどのような慰めの言葉といいますか。お母さんの方から翌日また手紙が来まして、一切の手紙、返事はもうありません。私は息子のことを思い出すと涙が止まらなくなると。放っておいて欲しい、ということで、私は植村先生と相談しまして一切の返事も出さずに高知の地から、その少年の冥福を祈ったと、そのような体験がございます。植村先生も多分覚えておられますと思いますけれども、そういうことで、植村先生に本当にお世話になったということで、植村先生からお

願いをされると私も断れないということで、当時、大阪から鳥取に転動してちょっと神戸からはるか離れた鳥取の地まで植村さんのご紹介により富永理事長ですか、と2名がこの冬2月に尋ねて来られて、実は動物セラピーというそんなシンポジウムをするんだけれども是非力を貸して欲しいと。いや、植村先生から言われたんだと言われまして、これはちょっと断れないけれども開催地が神戸でもあるし、神戸の保護観察所に頼むべきじゃないかということでご辞退を申し上げまして、その時鳥取の名産のカニを、いっぱい食べて頂いて、これでもう手切れ金代わりということで、満腹で二人ともこれで十分だなと、これでやれやれと思っていたんですね。ところが神戸の保護観察所に行きましたら、なかなか話が進まない。そのようなことがありまして、Knotsの方で上級機関を通して、法務省にこのシンポジウムの後援をお願いしたら、法務省もそういう前例がないと断られましたということなんです。前例にないことはやめておこうと。そういうことで私が受けざるを得ない、植村先生の顔もこの際一回だけでも立てないと大いに裏切り者であるというお叱りを受けるかも分からないということで受けさせて頂くということになりまして、本当にもう、一月前のことなんです。

私も動物セラピーが分からないので、制度の解説だけでもよろしいよ、と言われたんですがそれではこのシンポジウムの値打ちがないと、意味がないんじゃないかということで奈良の少年院に出向きまして、奈良の少年院長さんに日本でこういう動物セラピーをやっているんですかと、アメリカでは再犯率ゼロというふうな成績があるんで、日本の少年院はどうなんですか、ということでお話を伺ったのが一月前だったと思います。その時に、いや、日本の少年院はそれどころじゃないんだと。と言いますのは1997年、平成9年ですね、皆さんご存知の酒鬼薔薇聖斗、神戸の児童の頭部を切断するあいつた中学生の事件がございまして、それがきっかけでもないんですが、厳罰主義もありまして、少年院が非常に過剰収容ということになってきました。その事件をきっかけに法務省のほうも、あるいは、少年法があまいといいますか、それだからそういう非行がおこったという意見が強かったということで少年法も厳罰化の方向で改正されました。但し少年院の方は、そういった少年の処遇について、情操教育、小動物の飼育、花の栽培等生命の尊さを認識させ、豊かな人間性を育てる、そういった少年教育がぜひ必要であるという通達を出しています。ただ厳罰にすれば、更生していくという

ものではありませんよ、ということで、少年院も過去の色々な体験で、厳罰主義では少年は更生しないということは分かっていますから、そういったことで平成10年に、各少年院に小動物飼育の一環として熱帯魚の飼育をまず取り入れたということなんです。それで奈良の少年院も熱帯魚の飼育を始めたということですが、先程も申しましたように平成11年、非常に例えば大阪ではひたくり事件が年間1万件近くおこっているということがありましたし、鑑別所が収容しきれずに、代用鑑別所ということで警察の一角が鑑別所の代わりになるというような中で、少年院も4人の居室、2段ベッドが2つあって、そういう収容居室があるのですが、それで収容しきれないので通路の廊下に、更に簡易ベッドを入れてそこに寝かせると。定数4人のところを6名、あるいは7名。だからその部屋のトイレに行くにしてもかなり不自由で、その中でトイレに行くのに足を踏んだ踏まないというふうなそんな諍いがあったり、院長さんに言わせれば平成11年の各地の少年院はかなり危機的な状況であった、ということでありました。熱帯魚の飼育はどうなったかといいますと、少年の管理保護に追われて、熱帯魚の飼育にはとても手が回らないと。1年位でもう熱帯魚もやめましたということでありました。少年院は全国に53施設が設置され、初等、中等、特別、医療と、いうふうに資料に書いてあると思います。その少年院の分類は一番下に1, 2, 3, 4とあります。その奈良少年院は、この3の全国7ヶ所ある特別少年院であります。心身に著しい故障はないが犯罪傾向の進んだ、概ね16歳以上23歳未満の収容、ということで、大体半数が少年院収容2回以上の経験があります。3回目位になると、次の少年刑務所というふうなことがありますから、大体2回位経験している人が半数位を占めていると、非常に犯罪傾向が進んでいるということがあります。この奈良少年院ではそういった状況でありますので、熱帯魚の飼育すら手が回らないという中で、それは立ち消えになったということで、このジョアン・ドルトンさんが、今度11日に来られてシンポジウムがあるので、動物セラピーに関する取り組みは無いですかと院長さんにそんな話をしていたら、いや、うちの収容少年がジョアン・ドルトンさんのことが書かれた本（「ドッグ・シェルター 犬と少年たちの再出航」今西乃子著）を読んで、すごく感動していたと。その少年は、幼少期の時に実母が蒸発して、すぐに施設に行き、小学校の時に義理の父親と実母が現れて引き取られるんですが、義理の父親から非常に虐待を受けると、いうことで家出をし、生活苦からの窃盗、それからあるいはまた、生活せんが為の恐喝事件、そんなようなことで少年院に2回入った少年でございます。その少年は、虐待をされたことで非常に無気力、投げやりで指導困難な少年であったということでありました。そういうことで少年の処遇に困っていたところ、少年院の読書感想発表会で、この少年がこの本の感想文を今までと違

た態度で、発表していたと。本当に唇を震わせて、声も大きい。これは今までと違うな、この本人が本当に感銘を受けたんだな、ということで、少年院の院長さんから紹介されまして、実際そういうことがあるんですか、ということで、もう一人発表者がいたのですが、早速そうしたらその感想文のコピーを見せて頂けませんかということで少年院の院長さんに、少年の了解を得てコピーを貰ったんですね。それで抄録にちょっと書いてもあるんですが、「なぜ私がこの本を選んだかといいますと、誰も発表していなかったから。この著者である今西さんが実際にアメリカにある少年院のプロジェクトチームを通して少年達の変わっていく姿を知らされていることが書かれた本です。」ということから始まりまして、抄録の私の部分にちょっと書かして頂いたんですが、ドッグ・シェルターの犬と少年たちの再出航を発表した少年は、感想文の中で、「犬を愛し犬とともに過ごした少年院の100人を越す子ども達は再犯をおかさなかった。それはジョアンさんとともに犬を通していく中で無条件の愛を感じられたからだと思います。私はこれまで親の愛を受けたことがなかったように思います。この本を読むことで、親が子どもにあたえる愛の必要さを知った上で、私は子どもに対して無条件の愛を教えられるような人間になりたいです。」というふうに結んでおりまして、今までと違った態度で時々面会に来ていたお母さんが、この少年が変わっていくことによって母親も、これなら受け入れられるという、お母さんも変わってきたと。よく、親が変われば子どもが変わるといいますが、子どもが変わればまた親も変わるという部分があるんですね。最近に母親が来まして、非常に良い面会だったというふうに聞いておりますし、このジョアンさんの本が本当に更生に通じていくのであれば本当に素晴らしいなと思っております。これはやはり施設の中でのことですから、これを社会に出てからこの更生のための意欲を指導していくのが保護観察であるということでもあります。少年院に入れば仮退院ということで植村先生などの保護司さんが、また保護観察所の保護観察官と共に更生の為の指導にあたるのですが、そんなようなことでありまして、そうすると私もジョアンさんに少年の話を伝えて頂けないかと、日本の収容少年に、そのようにジョアンさんの取り組みに非常に感動して、なんとか更生していこうと、そういう意欲を示しているという少年がいるんですというふうに、Knotsの方を通じて言いましたところ、ジョアンさんが、じゃあそれでは奈良の少年院に直接行って、その少年を激励致しましょうかとそんな話になってきまして奈良の少年院院長に話したら、それ素晴らしいことですよと、是非お願い致したいということに話がとんとん拍子になってきまして、明日、ジョアン先生が奈良の少年院収容生全員に、講演を頂くという話になってきたわけでございます。この件を通じまして私は非常に予算と人員のかかる問題、先程色々な要素が揃わないと進めないプログラムであるという

ことを聞きまして、日本の施設の予算のなさと人員不足、保護観察もそうですけれども、たとえば私大阪で平成7年から3年間一番忙しい現場の観察課長をやっていましたけれども、保護監察官一人あたり200件持っているんですね。約200件。保護司さんがいましてこれは非常に過剰なケースで私も所管の課長でありましたが連休もなかなか休めない状態が続いたと、いうふうなことでありまして、大阪という土地柄ですね、無期徒刑で仮出獄してくるんですね。無期徒刑でも成績が良く受入れの条件が整えば殺人、凶悪な事件を起こした無期の刑の受刑者が仮出獄してくる。大阪で当時私が引き継いだ時に、この無期徒刑で仮出獄で保護観察された人が何人いるかといいますと、何名位いると思います？無期徒刑で、殺人を犯して無期懲役にふせられて、世間一般であれば、その方は一生刑務所にいるんじゃないかなというふうなことを思われるかも分かりませんが、通常大体受刑25年位で、本人の更生意欲、あるいはまた受け入れ環境、そういったことを勘案して仮出獄で出てくるんですね。私が所管の課長で引き継いだ無期の人数は83名。大阪府下で83名の人が仮出獄で、いるわけでございます。今皆うわーつと言われましたけれども、ところが、その人達、凶悪事件を犯した無期の人達も、仮出獄してくる人ですから当然更生の意欲、罪の償い、そういったことの条件が揃った人達でありまして、一人一人の生活を見ていきますと、被害者に対する毎月の弁償措置をきっちりやっておりますし、墓参、あるいは遺族の感謝の措置もやっているというふうなこととか、つぶさに見ていきますと本当に模範的な人達が圧倒的に多いと。これであれば、被害者の人達も、確かに殺された。あの方に殺されたけれどもあれだけの姿を見せて貰えれば我々もそういうふうな人達を宥恕したいという人達がかなり、被害者の方も増えてきました。そういうことで今現在、そういう人達は、結局恩赦ということで仮出獄を12,3年そういう実績を積んでいけば、そしてまた再犯の恐れがないということになれば恩赦ということがあるわけでございますが、恩赦になって私が出て行く時には大体無期が50件位、この3年間成績不良で収監したケースを除いて重大再犯事件ゼロでありました。無期の場合ですよ。少年の場合は厳しいです。だけど選ばれた条件のもとで仮出獄させておりますから。従いまして、凶悪事件をおこしたから、更生の道なしとか最近ある雑誌に載せておりましたけれども、こういう書き方をされますと、非常に残念であるというふうに思います。それで、もう一人、さっきの少年の話なんですけど、この子は、嬰兒殺人でやっぱり奈良の特別少年院におります。「僕がこの本を選んだ理由は、本の見出しに一度は人に捨てられた犬と過ちを犯した少年たち、再びの旅立ちというふうな言葉を見た瞬間に心を打たれてこの本に決めました。」ということで、感想文5枚書いています。この少年は、前歴は傷害事件、この奈良少年院の入

所は嬰兒殺人事件ということでありまして、この少年が自分の犯罪について、最後の方に触れておるんですが、「僕は自分の享楽のためにしたことが、この世に生まれるはずの尊い命を奪ってしまいました。本当なら惜しみなく注がれるはずの親の愛情を知ることもしない。そんな権利は僕にはありません。生命の尊さが分かかっていませんでした。けれどドッグ・シェルターの本と出会うことによって、生命の尊さについてほんの少しですが気付けたように思いました。そして生命というものは愛情の中から生まれることだと僕は思います。どんな生き物でも同じ「命」をもった生き物だと僕は思います。命に順位もなく、命は全て平等でなければならないと思います。」というふうなことを書いておりまして、「それが僕の、この世に生まれてくるはずだった子どもに対する報いだ」というふうなことで、本当に愛情というものを自分が人に与え、また自分を大切にしていこうというふうな尊さを、この本から学び取りましたということでした。2名の少年が感想文に書いておりまして、他の収容少年もそれであればということで、明日ジョアン先生が来られるということで、全員このドッグ・シェルターを読んで、明日ジョアン先生が来られた時に、大いに質問して、自分がどうすれば更生していけるのか、この本から何かヒントがあるだろう、というふうな取り組みを行っていくという予定になりました。この奈良少年院にジョアン先生が来て頂くことによりまして、日本の少年教育に、一石を投じられればなど私も願っております。動物セラピーといいますが、ドッグ・シェルターというふうなことはとても予算、人員も無理でありますけれども、こういった動物セラピーマインドといいますが、それを、皆感じ取って頂いて、その精神でもって収容少年が、学んでいって頂ければなどそんな思いであります。それで、日本で非常に有名な企業の奈良トヨタ自動車の社長さんにこの話を紹介したら、是非私もジョアン先生の歓迎会に参加させて欲しいということになりまして、日本の企業も、もう少しこういった財政的な支援活動をお願いできないものかなと、そういうふうな道作りをジョアン先生が来て頂く中で、少しでも前進できればな、というふうな思っておりますし、私もこの機会を失することなく最大限活かさせて頂こうという思いでおるわけでございます。

後、日本の更生保護制度、それから刑事司法関係はなかなか国民になつきにくい、なじみにくいというようなところがございます。この際、後の討議で質問でも頂ければ、またご要望等、またお気付きの点がありましたら、東京であります全国所長会議の場でも発表する機会がありますし、是非、何卒建設的なご提言がございましたら、また後の質疑応答時間の時によろしくお願い致したいというふうに思います。どうも有り難うございました。

山崎：青山先生どうも有り難うございました。よほど富永さんのことが脅威に思われていると感じるようなコメントが沢山ございまして、富永さんが初対面で青山先生にどのような対応をなさったのか後でじっくり懇親会の会場なんかで聞きたいなど私楽しみに致しております。先生のおっしゃっておられた、やはりお金がないとかそれからなかなかそういった人が見つからないというのが日本の場合は切実な問題だと思いますので、ジョアン先生がいくら良い起爆剤となって下さっても即日本の制度の中にそれが反映されるとは勿論思いません。ただやはりお金がない部分はなんとかすることが出来ても、ソフトウェア、つまり人がいない、こういったことを教えられるとか、こういったことをきちっと良心的に運営出来る人がいないというのが一番我が国においての切実な問題だと思っています。お金よりもですから今後もし法務省なり、あるいはそういった方々がこういうプログラムをしたいと思ったら、ソフトウェア、どういった人材がいるかということ、よほどお気をつけにならないとやはり動物の世界でも、他の商業的な世界でもそうですが、シェルターとか、ドッグレスキューとかアニマルセラピーという美しい言葉ばかりが一人歩きをして、それで一攫千金を狙うような方々が実は沢山、私は常日頃から「魑魅魍魎」と言う言葉を使っておりますけれど、いる世の中なんです。その中で県の行政などもセラピーをやりたいということで安易に予算を出してしまったりすることも多々今までありました。ですから、そういった意味では我々、特にここに集まった動物関係者の方々にとってはお急ぎにならない方がいいということ、それから人材選択を、もし本当に仮にボランティアでもお頼みになるのであれば、しっかりやって頂かないとむしろネガティブな結果にさえつながる危険性があるということをお伝えしたいと思います。これは先程ジョアンさんとのお話の中でアメリカでも全く同じことが起きているということで、恐らく私が何を言わんとしているのか皆様方は良くご存知だと思います。

## パネラースピーチ

東京工業大学 保護管理センター 教授  
影山 任佐



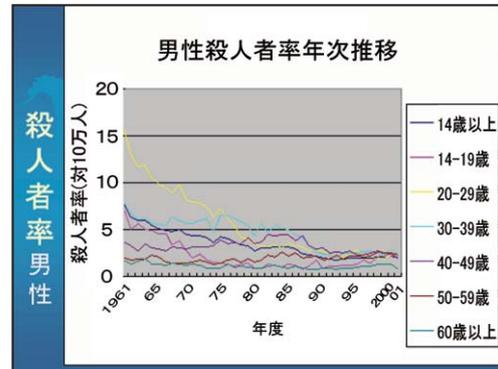
山崎先生、ご丁寧なご紹介頂いて有り難うございます。三、四年前に三重県で一緒にさせて頂いて、活発におやりになってということで私の方が随分尻を叩かれたような感じでこの問題について多少関与しているということです。ただ私の方はペット療法を専門にしているわけではありませんので、ペットに関しての私なりの個人的な体験を多少交えながら後半の方でお話します。前半の方は「空虚な自己」とか、「のび太症候群」とか、そういう若者をどういう風に理解するのかという切り口、キーワードを中心に、現代の犯罪・非行について触れていく、という形にして私の責任の大半を果たしたいと思えます。ただ与えられた時間が20分+αということですので、普段1時間位の話ですので、相当はしょった話になりますので、その辺はディスカッションの段階で補充させて頂きたいと思えます。用意したスライドが16枚ということですので、1枚に1分ちょっと位ずつにさせて頂いて、前置きを抜きにして早速本題の方に入らせて頂きます。



【スライド 1】

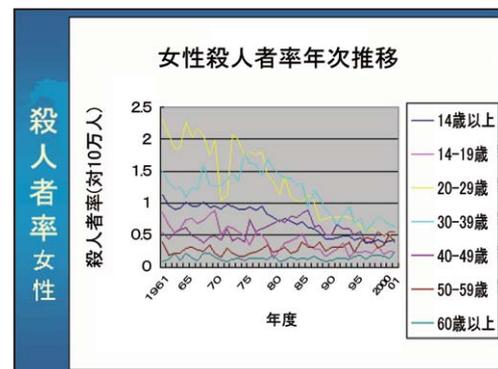
最初に用意した【スライド 1】これはゴヨウツツジということで、ヤマツツジの一種なんですけども、ヤマツツジは普通10年位で花が咲くんですが、これはもう100年200年ということで、雅子様の娘さんの愛子様のみしるしにしたということで有名な花なんですけど、那須の山中に咲いているわけです。風雪に耐えて咲くんですけども、早咲きの花もあれば遅咲きの花もあるし、風雪に耐えて初めて立派な花が咲くということで、人間でも非常に個性々々と、植物さえもそれだけ千差万別であるというのに人間がなぜ画一、一様なんです、家庭教育においても社会においても一つの価値観を押し付けられながら生きていかなければならないのかという問題を考えさせられるということです。

ところでわが国においては凶悪事件、殺人事件という随分頻りに最近報道されていて、うっかりすると日本では凶悪



【スライド 2】

事件が、特に少年の凶悪事件が増えているんじゃないかという風な印象を持たれるかと思いますが、実は10数年前から我々の方の犯罪者率ということで、殺人率を研究しているわけです。【スライド 2】凶悪犯罪についてですね。その一端をご紹介したいと思うんですが、ご存知のように日本は少年の人口がどんどん減ってきているということで、出生率が減ってきていますので、少年の人口に占める比率は減ってきているのですが、数も減ってきているということは単に、人口が減ってきているということではないということで、人口比で対10万でどのぐらいの殺人者率が年間に発生しているかというのが今お示ししているグラフです。これは縦軸が10万人、横軸が1961年から。黄色いのが20歳代、問題の14歳というのはこの紫なんですけれども、この様に低下しているわけです。それで、世界各国の殺人率は実は20歳代が、しかも前半が一番高いんですね。日本はどんどんどんどん低年齢化して来まして、ここでブルーの30歳代、ここで40歳代に追い抜かれるというような状態が続いたということで、実は、20歳代が一番高いのでこれは生物学的な条件によって殺人率が高いのではないかと言われたのですが、日本はこういうふうな時代と共に変動するというので、生物学的な条件と言うよ



【スライド 3】

りも時代、あるいは社会的な状況によって20歳代が高いというふうな考え方も成り立ちうると、いうふうなデータが出ているわけです。

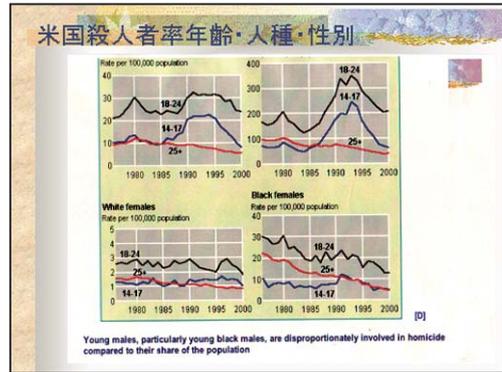
これは女性の方【スライド3】ですけれども、縦軸は10分の1のスケールということで、男性の約10分の1。女性の凶悪犯罪、暴力犯罪はだいたい世界各国を見ても、男性の約1割から2割、せいぜい2割なんです。そういうことで10分の1のスケールで収まっているのですが、年度は男性と同じ1961年から。これもやはり20歳代が減ってきて、10歳代が減ってきていると、いうふうな男性と同じような傾向をとっているということで、日本においては実は戦後の長い時期、経済的な成長の時期も含めて繁栄の時期も含めて最近に至るまで殺人率は女性男性共に減ってきたと。若干最近男性も増え気味のところがあるのですが、ここ数年のところ、それも頭打ち傾向にあります。こんなに2とか2.5とか、言う形には女性の方もなっていないと。男性もそうです。



【スライド4】

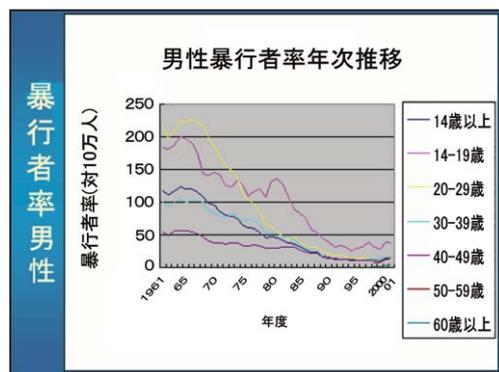
ところが一方アメリカ【スライド4】ですが、これはFBIの統計のデータのところから取ったのですけれども、これは20世紀、1900年からデータをとっているのですが、実は戦前、10近くまで行って、大不況の後、ルーズベルト大統領の時代ずっと戦時中落ちていくんですね。戦時中は大体どの国でも男性が少なくなりますし、戦時統制ということでコントロールのきいた社会ですので凶悪犯罪が減ってくるんですが、ずーっと減ってきています。ところが、ケネディ大統領の時代に、ボムになって、5を切ったところで急激に上がってくるわけですね。多少波がありながら最近ここ10年ぐらいに減ってきている、ということがアメリカの特徴で、日本は一貫して下がってきているのですけれども、アメリカはベトナム戦争あるいは市民運動が盛んになった、あるいは我々と同じような団塊の世代のベビーブーマーの時代に若者人口が増えたということもあって、極端にこういうふうに変化してきたと。あと薬物の影響、あるいはガンコントロールの問題、ということがうまくいってない時期にやはり犯罪が高水準をずっと動揺しながらも保ってきて、最近こうやって減ってきたと。これについてはいくつかの著書の中で、研究書が出ていて、アメリカの、何故最近こういう凶悪犯罪・暴力犯罪が減ってきたかということについて

ては6つほどのファクターがあって、それぞれが互いにたつた一つの要因では説明出来ずに補強しあってこういうふうな減少傾向を示しているのだから、と。ガンコントロールがうまくいった、あるいは薬物について乱用が減ってきたとか、あるいは受刑者数が増えたとか、あるいは経済的な状況が良くなったとか、あるいは警察の治安対策がうまくいっていると、幾つかの要因があげられているわけです。



【スライド5】

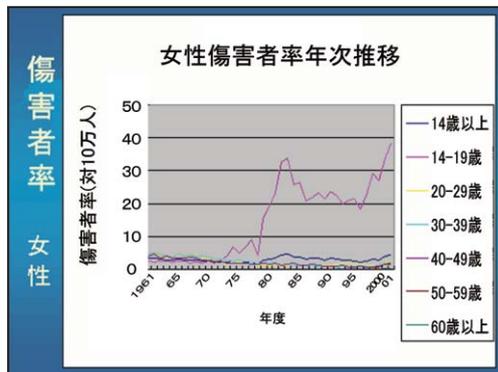
これはアメリカの殺人者の年齢別【スライド5】なんですけれども、ジョアンさんの収容している14歳から24歳までという若者人口なんですけれども、実はこれは殺人率で上の段がですね、これが男性、これが白人、これが黒人です。下が女性。これが白人でこれが黒人なんですけれども、このようにですね、アメリカの犯罪率、凶悪犯罪率というのは男性の中でも黒人が、非常に高い時期があって、黒人の若者の犯罪発生率、凶悪犯罪率が減ってきたおかげで全体に減ってきている。大人の方はこの前から一貫して減ってきているので、そこに若者の凶悪犯罪が減ってきて最近のアメリカの10年以上に及ぶ減少傾向を支えているということで、黒人の人口、さきほどジョアンさんの方から収容スペイン系とか黒人系とかあったと思うんですけれども、実はアメリカの黒人は12%程度なんですけれども、加害者被害者を合わせると白人と殆ど同じということで、黒人の方は数倍白人に比べて殺し易くて殺され易いことになっているのですね。しかしこれは人種的な生物学的な問題というよりもアメリカが独立解放以降ですね、やはり黒人の地位、社会的な処遇、それがやはり格差があって、十分に白人並みになっていないという社会的



【スライド6】

な要因、社会経済的な文化的な要因によるものであるというふうに考えられているわけです。それだけにアメリカの病根は人種問題が非常にこういう犯罪統計から見るとですね、まだまだ根が深い問題を抱えているというのが実情であろうと思います。

また男性の方に戻りますけれども、先程は殺人事件をご紹介したのですが、これは暴行率【スライド6】ということで、暴行も男性は10万人あたりでこのように20代、10代、14歳以上ですけれども、かなり急激に下がってきているというのが日本の実情で、アメリカのようにこういう感じではないということですね。



【スライド7】

ところがですね、今は男性ですが、女性【スライド7】ですね、極端にこれは上がってきているんですね。これは14歳以上の、10代からとってもそうなんですけれども、女性なんです。したがって男性と比べて、これは暴行をとっても同じなんです、暴力犯罪で殺人を除くとですね、女性は10代がかなり粗暴化して暴力的な傾向がはっきりしてくる。これについては警察が捜査に手を強めて、検挙率を高め、刑事事件にするような形でもって受け付けるようになってしまったというような一つの時代的な要因があって高くなったという説もあるんですけど、そういう面もあるのでしょうか、実際にもこういうふうになってきていて、相伴ってこういう結果になっているんじゃないかと思うように思っています。問題なのは、これは10歳代なんですけれども、10年後には20歳代、ここに入るわけなんですけれども、やはりほとんどこの高くなった部分が20歳代になって高くなっていないんですね。ですから、女性の場合には10歳代で一暴れしているけれども20歳代になると殆ど前の世代と変わらない状況になっているということで、非常に社会的な適応が20歳代になるといいのではないかと考えられると。ただしですね、これは刑事統計ですから家庭内暴力とか幼児虐待とかという社会病理的な問題がここには直接入ってきてないんですね。従ってこういう女性が10年後に家庭に入った場合に幼児虐待とか家庭内暴力とかという問題をおこしているかどうか。もし家庭内暴力とか幼児虐待をしている女性たちの中にかつてこういうふうな10代で暴力犯罪を犯したグループが入っているとすれ

ば、ここで早期介入して治療すれば、処遇すれば家庭内暴力とか、幼児虐待がもう少し減るんじゃないか、というふうに思われますね。そういうことでこの辺でペットセラピーとか、アニマルセラピーということをどういうふうにして継続的に犬や猫の世話をさせるような治療法を、導入すればこの女性達の20代になった時の家庭内暴力というものが収まるかも知れない、というようなことも考えられるんだということですね。

今まではデータのなことをお話したんですけど、次に心理的な問題に入りたいと思いますが、時間の関係で先程の何故日本だけが減ってきたのか、戦後日本にということ、これは諸外国と比べて、ヨーロッパでもアメリカでもそうですし、東南アジアにおいても日本の青少年のように殺人率を含めた暴力犯罪があれほど極端に減ってきている例というのがなくて、これが日本が平和であって軍隊を持たないと、戦争体験もないと、というような要因が一番大きいのではないかと、いうふうには思っておりますし、それについてのデータもお示したいんですけど、今日は時間がないのでここで



【スライド8】

はカットさせて頂いて、もう既にスライド【スライド8】が出ておりますので「のび太症候群」というふうなことをお話したいと思えます。のび太症候群の特徴というのはハイテク機器依存と幼穉的万能感、この二つをのび太症候群と言っているのですけれども、ご存知のようにのび太はないない尽くしということで、色男金も力もなかりけり川柳があると思えますが、男に生まれたからには何か一つ位とりえがあるだろうというふうに考えられるわけなんですけれども、のび太の場合は金もなければ、力もないという、学力的にも落ちこぼれてしまっているわけですね。お金の象徴がこのスネ夫というお金持ちの坊ちゃん、力の象徴が暴力的な形ですけれどもジャイアンと。愛の象徴はしずかちゃんだろうと思うのですが、のび太はのしずかちゃんを愛を勝ち得ようと思って、自分に能力のないようなことに次々トライするのですけれども、あるいは窮地に立たされるのですが、ことごとく失敗してみんなに馬鹿にされて、いじめにあっているという状況ですね。そこにのび太としずかちゃんは後には結ばれて、22世紀まで子孫がいるのですけれども、22世紀の子孫が過去を振り返ってみてあまりにも情けないご先祖様だと言う情報をキャッチして、お助けマ

ンとして、ロボットとしてこのドラえもんを現代に送って、色々なハイテク機器、アイテムを出してはのび太の窮地を救うということですね。のび太はつついその、自分の力を錯覚してこの幼児的万能感にあおられてですね、有頂天になってしまってやりすぎてしまい、失敗してしまう。ですから自分の力が大事だというふうなストーリーの展開で一つのエピソードが終わるということだろうと思うのです。ところでのび太の場合、この漫画に出てくるこの幼児的万能感というものは我々小さい時から誰でも持っていることで、我々お酒を飲んだりするとこの幼児的万能感についつい振り回されるようになってしまうわけですね。そういうことで、誰でもあることなんですけれども、それで、人間の問題を考える時にこの幼児的万能感というものは非常に意味深長な問題を抱えておられますね、実はラテン語のヒュームスという言葉があるのですけれども、それが土を表すのですが、それが英語のヒューマンとか、あるいはフランス語のオムという言葉とか、あるいはホモサピエンスのホモというようなラテン名の元になったと言われているのですが、その土がどうして人間になったか、ヒュームスという言葉がなったかというのには二つの説があります、一つは土から生まれて土に戻るという仏教、あるいは聖書でもそうでしょうし、ユダヤ教でもそういう教えがあるので、それが人間をあらわすようになったというのが一つの説です。もう一つの説は、土から転じて大地を表し、大地に縛りつけられた存在だというふうになったというふうに言われているんですね。その大地に縛りつけられて空を飛べない存在というのが人間であるというふうに考えられるようになったということです。ですからもともと人間と言うのは天使や神と違って空高く飛べない存在であるということなんです。それが空高く飛んでしまった時に幼児的万能感にあおられてしまうとギリシャ神話のイカロスの星のように羽をつけて天高く舞い上がって、落下してしまうということだと思えますね。そういうことで、ドラえもんの世界の第一話にも、ハイテク機器の中で出てくるのはタケコプターで、最初に空を飛ぶということで、この幼児的万能感の象徴、精神分析的には空を飛ぶのが万能感の象徴というふうに言われていますので、第一話にそういうのが出てくるのも偶然ではないんだらうというふう思うわけ



【スライド 9】

です。のび太については色々語りたいたことがあって、現代人の心を理解するキーワードになり得ると思うのですが、ここでは時間がありませんので簡単にこれだけにさせていただきます。

もう一つ私が若者理解にキーワードとしているのが、生活ソフト欠乏症【スライド 9】というお話させていただきます。これは色々なエピソードがあるのですが、最初に気がついたのが大学の学生達をゼミに連れていった時に、青少年旅行村みたいなのがありまして、そこでバーベキューをやろうということで、釣りをしたんですね。ところ、学生達がざわざわして釣りにならないんですね。どうしたんだろと思ったら、餌の付け方が分からない学生がいてということで、餌の付け方を教えたんですね。その後また騒いでいるのでどうしたのかと思ったら、今度は魚がかかったけども釣り上げ方が分からないと池のまわりをバタバタバタバタしているわけですね。そういうことで釣り方を教えて、そのあとバーベキューになったんですけども、そのうちまでに二度ほどのカルチャーショック、ジェネレーションギャップを感じたわけですが、三度目が襲いましてですね、それはどういうことかといいますと、食べ始めたら今度お魚食べないんですね。学生が何人か。どうしたことか聞いたら、丸ごとの魚は食べないと、切り身の、あのお刺身のような魚じゃないと食べられないと言うんですね。それで我々の世代とは随分違った世代が普段からいるなどは感じていたんですけども、その日のエピソードで三度ジェネレーションギャップというかカルチャーショックを感じまして、どうなっているんだらうと思ったわけです。そしてその後、二、三年後にまた合宿に来まして、線香花火みたいなものを作ってスナップ写真の撮影を学生に頼んだんですね。東京へ帰ってきて出来た写真を見ましたら、手元で光る花火しか写っていないで、それを楽しんでいる学生達の表情って全くないんですね。人間関係論を教えているのにその人間の姿を心の中でキャッチしているということがなかなか出来にくい、その心象風景が写真となって表れているような、そういう思いを抱いたわけです。そういうことで現代の若者はどうも物質文明を離れたところでの自然の中で生活する能力、あるいは対人コミュニケーションの能力が欠けている。我々テクノロジーの大学にいますので、そういうことで生活ソフト欠乏症ということを知っているわけですけど、その根本はやはり対人関係のコミュニケーションだと思うのです。理工系の学生ですから表計算ソフトは非常に充実しているのですけれども、やはり必要なのは、対人コミュニケーションを図る為のワープロソフトでしょうし、あるいは相手の人間について理解するようなデータを掴むようなデータベースが必要だと思うのです。そういう統合型のソフトが必要なんですけれども、表計算のソフトばかりが発達してきているという感じを抱いているわけです。

先程ののび太症候群と生活ソフト欠乏症【スライド 10】で



【スライド 10】

すね。実は漫画のキャラクターののび太は、スネ夫やジャイアンにいじめられながらも、あるいはしずかちゃんのを獲得しようとして無残に失敗しながらも、それを目指して悪戦苦闘するという人間関係の中で切磋琢磨する能力があるんですね。ところが現代ののび太達は、生活ソフト欠乏症のために、そういう人間関係でわずらわしいことをするのであれば、機械との一人遊び、あるいはドラえもんとの二人遊びの世界に入ってしまった方が非常にスマートだというふうに考えてしまうんですね。そういうことで、のび太にあったその人間関係でのソフト形成ということが現代の若者達にはかけてしまっていて、両者が合併して超のび太といっているわけがあります。なぜ超かといいますと、学生に話すこともあるので、お前達はのび太にあったものささ最近では失われているというはあまりにも学生達が可哀そうなので一応超といっているのですけれども、その価値判断を離れればポストのび太と、のび太以降ののび太たちということで、ポストのび太と言ったほうがいいのかというふうに思っているわけです。

有罪判決	両親が揃った家庭		母子家庭	
	両親不仲でない (N=103)	両親不仲 (N=27)	情愛深い母親 (N=37)	情愛希薄な母親 (N=34)
犯罪なし%	46.6	33.3	51.4	26.5
軽犯罪のみ%*	27.2	14.8	27.0	11.8
重大犯罪%	26.2	51.9	21.6	61.8
	100.0	100.0	100.0	100.0

$\chi^2(6) = 20.79, p = 0.002$

\* 交通事故は除外されている。 (マッコード, 1982)

【スライド 11】

ところで家庭の状況と犯罪非行【スライド 11】はどうなっているのかということですが、これは同じ名前のジョアン・マッコードさんというアメリカの女性の犯罪学者が、実はさきほど母子家庭の話がなにか出たかと思うのですが、戦前から母子家庭においては、父親のない家庭というのは少年にとって犯罪発生率が非常に高いだろうというような説が戦前からあったわけです。一方それについては、母親がしっかりしてれば犯罪発生率は低いんだというような反応も勿論学説としてはあったわけですね。しかし実証的にそれをデータ

的に、解析して示すということはありませんでした。そういうことで、このマッコードさんはボストン郊外の家庭の母子家庭と両親揃った家庭について調査をして、確か20年か30年位のかかり長期間の追跡調査をしているわけですね。その中で今回この重大犯罪の発生率に絞ってお話したいと思うのですけれども、一番高いのはこの母子家庭の中で61.8%でしょうか、一番低いのもここ21.6%ということで母子家庭なんですね。ですからいずれにしても母子家庭が一番高く一番低いという結果がでているわけですが、この母子家庭を分ける要因は何かといいますと、お母さんの子どもに対する愛情がどうなのか、ということなんです。お母さんの子どもに対する愛情が希薄な家庭においては61.8%、情愛深い母親においては21.6%ということで、この差約3倍の開きがあるという結果が出ているわけです。一方両親が揃った家庭はどうかといいますと、両親が不仲であるということと、両親が不仲でないということで分けているのですけれども、不仲な家庭が51.9%、両親が不仲でないところが26.2%ということになっているわけです。こういう話をすると、昨日派手に喧嘩をして家は不仲な家庭なんじゃないかというようなことを心配する家庭もあるんですけど、仲がいいほど喧嘩するということが喧嘩も出来ないほどに心が冷え切ってしまうという家庭だということも考えて頂ければいいんですね。家庭内別居状態というふうなことです。そうしますと、要するに構造的な欠損というものじゃなくて、家庭におけるその人が、母親がどういうふうにも関わっているか、あるいは両親が揃っていても両親同士がどういうふうな関係にあるのかといふ問題が実は重要なんだと。ただ単にいればいいというものじゃないと。いたからにはきちんと子どもにたいしてどうにかかわりをしているのか、あるいは両親がどういうふうな関係にあるかというのが実は重要なんだと、いうことで構造の問題というよりも機能的な関係性が実は非行犯罪の発生率に重要なのだというようなことを示唆する結果になっているわけです。もう一つ注目してほしいのは、ここです。この筋ですね。両親がそろった家庭で両親が不仲であると51.9%、母子家庭で情愛深い母親ですと21.6%ということで、この差が約倍ぐらい、以上違うんですね。子どもにとってはこんな不仲な家庭で育つよりもこういうお母さんに育てられた方が将来犯罪の発生率が2分の1で済むという結果なのです。そういうことでアメリカでは一時、この結果もあって離婚を勧めたお母さんがシングルマザーで、育てていくというような形になったり、もう一つ注意してほしいのはお母さんが情愛希薄な母親の場合は、両親が不仲な場合よりも高くなってしまいます。ですから別れさせるのはいいんですけれども、その判定する向こうの家裁調査官のような人が能力が乏しく見誤ってしまうと、子どもにとっては両親を別れさせるは、とんでもない母親に育てられるはという結果になっ

て余計ぐれてしまうという結果になってしまうわけですね。そういうふうなデータです。

**家庭の状況と犯罪 2**

表2 家庭状況と重大犯罪 (%)

	両親揃った家庭	母子家庭
情愛深い母	(N=58) 22.4	(N=37) 21.6
情愛のない母	(N=72) 39.0	(N=34) 61.9
	$\chi^2(1)=3.96, p=0.047$	$\chi^2(1)=11.00, p=0.0009$
父(死の父)が アルコール中毒(-) か犯罪歴(-)	(N=84) 23.8	(N=31) 29.0
父(死の父)が アルコール中毒(+) か犯罪歴(+)	(N=48) 45.7	(N=40) 50.0
	$\chi^2(1)=6.38, p=0.012$	$\chi^2(1)=3.11, p=0.078$
子供の監督が十分	(N=87) 23.0	(N=31) 25.8
子供の監督が不十分で放任	(N=43) 48.8	(N=40) 52.5
	$\chi^2(1)=8.55, p=0.004$	$\chi^2(1)=4.97, p=0.026$

McCord, J., 1982

【スライド 12】

一方これは【スライド 12】、まとめたんですけど、先程情愛深い母親というのは母子家庭だけの問題で扱ったんですけど、それは両親揃った家庭においても重要で、このように2倍位の差でもって、やはり情愛深い母親の方が犯罪発生率が2分の1位ですむというデータですね。後、お母さんの役割ばかり強調しているんですけどもお父さんがどうかと言いますと、アルコール中毒か犯罪歴いづれか一方を持っている場合と両方ともない場合に比べて比較した場合、母子家庭においても両親が揃った家庭においても約2倍位お父さんがアルコール中毒ないし犯罪歴を持っている場合にはそれぞれ高くなると。母子家庭においてお父さんの影響っていうのはどういふものかと言いますと、6歳以前までは一緒にいたというふうな形になっているわけですね。ですから三つ子の魂百までもということなのでしょうけれども、6歳までの父親の影響があるというふうな考えられますし、もう一つはそんな影響が残るのではなくてもう少し生物学的な遺伝的な要因を考えた方がいいんじゃないかというふうなことも言われるわけです。しかしアルコール中毒はご存知のようにアダルトチャイルド、あるいはアダルトチルドレンということの元祖ですから、幼児虐待とか家庭内暴力という問題がやはり心身の発達過程において長期間に影響を与えるという報告もありますので、そういうふうな家庭環境要因として影響を与えているということも否定で出来ないだろうと思うわけです。もう一つ、子どもの監督が十分と放任ということなんですけれども、監督が十分な場合には両親がそろった家庭でも母子家庭でもそれぞれ2分の1になるということで、以上家庭環境と少年の非行の発生率ということは、お母さんが子どもに対する愛情、監督、父親の問題と、こういうことが大きな問題、両親との仲と、そういう幾つかの要因が取り出されているということで、日本でもこれを追跡調査して同様の結果が出ているというふう聞いております。

ところで先程示したように我が国においては我々の研究でも指摘したように、ここ何十年来、凶悪殺人事件、凶悪な事件、あるいは凶悪な暴力犯罪あるいは殺人事件というのは

男性を中心にかなり急激に減少してきていて、多い時の4分の1とか、8分の1とか、そういう数になってきているわけです。しかし少年犯罪全体を見ますと、戦後4つのピークがあると。現在はその4回目のピークだというふう言われているわけですね。その4回のピークを類型別に分けると大きく私自身は3つに分けられるんじゃないかというふう言っているわけですね。【スライド 13】最初のピークの場合は戦後の混乱期で、

**犯罪・非行の類型と時代背景**

表1-1 犯罪・非行の類型と時代背景

	「古典型」	「遊び型」	「自己確認型」
動機	物欲・性欲の満足 怨恨などの激情・ 熱情	スリル・ 刺激・快楽追求	犯罪による 自己の確証 力の確認
集団性	不定	主として集団	個人
心理	欠乏・不満	自由・甘え	「エゴバシー」 「空虚な自己」
社会背景	前近代・近代社会	高度産業化社会	脱産業化社会
トフラーの分類	第一の波	第二の波	第三の波
リースマンの分類	伝統指向	内部指向	他人指向

引用：1999

【スライド 13】

経済的に貧しい時代に犯罪非行が増えているわけですが、これは何も少年だけではなく大人の犯罪もそうなんです、これは古典型ということで、おそらく人類社会が成立して以降、階級差があつて経済的な格差があつて貧困であつた時代にはどこの時代でもどこの社会でも起こりうる犯罪ということだと思うんですね。動機としては主に経済的な利欲、あるいはその生物学的な欲求、性欲、そういう問題だと思いますし、あるいは怨恨や熱情などのような感情的な爆発というもので成り立つような犯罪ということで古典型、あるいは生活型というふう言っているわけです。第二の類型は遊び型というふう言っているわけですが、これは犯罪非行は遊びの延長ということでスリルや快楽を求めてなされるという特徴があつて、これは単独よりも集団でなされると。集団万引きとか放置自転車の持ち逃げというんですか、犯罪名は、占有離脱物横領という分かり難い名前になるんですけども、そういう風な犯罪が増えてきたということです。第三の犯罪なんですけれども、ここの当地で起きた神戸の事件とか、佐賀のバスジャック事件とか、あるいは豊橋の主婦殺害事件というふうなことを考えますと、これは生活型の古典的な動機とか目的からは理解出来ませんし、遊び型でもないということで、従来のタイプから理解しようと思うとなかなか理解し難いんですが、私自身は自己確認型というふうなことで、提唱させて頂いております。これはどういうことかと言いますと、empty selfということで自分自身の空虚感を抱えている若者、あるいは自分自身の幼児的万能感が挫折して自分の力のなさを感じているような若者達がそういう力の回復、あるいは自分の存在、空腹感を埋めるために犯罪によって社会的に関わる、犯罪によって社会的に自分自身を認知させるといふような動機でもって犯行を行うということで自己確

認型というふうな第三の類型タイプが最近の犯罪の特徴として現れてきているわけです。しかし数的にはまだ少数派ですけれども、時代の特徴を鋭敏に表している犯罪類型で、なかなか従来の事件からは理解し難いし、動機も分かり難いというのが現在の自己確認型というふうな名付けて私の方で提唱させて頂いている犯罪類型です。

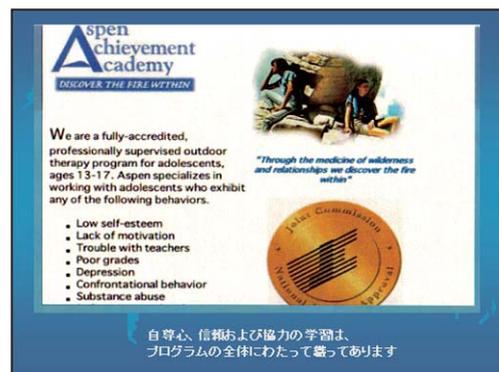


【スライド 14】

こういう青少年の対策【スライド 14】の中で、これはホームズというアメリカのプロファイリングの著者のものです。余談ですが、アメリカで何故プロファイリングなどをやっているかという、殺人の検挙率が極めて低いんですね。日本の場合90数%犯人を挙げていますけれども、アメリカの場合は現在でも60数%で、四割近い数が犯人逮捕に至っていないんですね。あとアメリカの犯罪は路上型犯罪ということで、見知らぬ者が見知らぬ者を殺してしまうというタイプが多いんですね。日本の場合は結構顔見知りが多いので、被害者が分かってアリバイがない者でその動機に合いそうな者を調べれば大体加害者に辿り着き易いというような殺人の特徴があるわけですね。ところが、アメリカで一体今何人位が殺人で殺されているかと言いますと、2、3万人位と言われているんですね。最近では減ってきていので2万件位だと思えますけれども、日本は、現在、殺人事件は千数百件なんですね。その中で既遂と未遂が半々ですから、恐らく700人位だと思えます。アメリカは人口2倍強位ですから、それで比率ですとアメリカの殺人率は相当高い、幾ら減ってもそういう状況であると思えますね。ところが日本は、自殺率を比べるとアメリカより高いんですね。ですから日本とアメリカでいうと日本はアグレッション (Aggression) を自分自身に向けやすく自己破壊的な傾向にいくし、アメリカの場合は、特に黒人の場合には外に向けやすく他者に攻撃が向きやすいというような国民性というか、そういう社会的な特徴があると思えますね。一方この青少年の殺人を減少させる手助けになると思われる一つの戦略は、早期介入である。早ければ早いほど、介入が早ければ効果が上がるということですね。その中の一つにホームズが紹介した、ある程度成功した処遇戦略の一つが治療的な野外キャンププログラムであるというふうなことで、キャンプ療法ということあげているわけ

す。恐らくここに今度はアニマルセラピーとかペットセラピーというのが付け加えられるようになると思います。ドルトンさんの成果が上があれば、教科書とかにそういうことが書かれてくるような時代になるだろうと思います。

その中でインターネットを調べると、一般民間で先程山崎先生からお話があったようにすぐに便乗して、経営戦略に乗せた形で企業化されてしまうということが向こうの特徴で、こういうふうな治療プログラムを組んで大がかりに、キャンプ療法を展開していますよというようなインターネットの広告ですね。やはり自尊心と信頼及び協力の学習プログラムを組んでいるというようなことを強調しているわけです。【スライド 15】



【スライド 15】

ところで今日のテーマの動物の問題とあれですけれども、この神戸の A 少年もそうであったように、あるいは宮崎勤連続少女誘拐殺傷事件もそうでありましたし、最近の事件の中でも特に注目されるのが、動物虐待と暴力犯罪というふうなことが注目されてきているんですけれども、実は犯罪学的には、もう古い時代から、戦後間もないときからアメリカのマッコードさんという方を中心に動物虐待ということが少年時代にあったものが大人になった時に暴力殺人事件に発展し易いんだというふうなことを展開しています。

これは【スライド 16】マクドナルドの三徴候ということで、動物虐待と火遊びと夜尿という3つが大人になっての暴力犯罪を犯す、少年時代にあった特徴だということなんですね。動物虐待も、昆虫や小動物について一過性に、尾っぽを抜いたり足をむしったり羽をむしったりということは、特に男の



【スライド 16】

子の場合はありがちなことであるんですけども、ペットのように人間の身近な存在である動物に対して、執拗に残酷ないじめ方、あるいは虐待を何度も繰り返すというパターンになるとこの動物虐待としては大変憂慮すべき兆候だというふうに思うわけです。フランス刑法ですが、私はパリ大学に留学していて多少ヨーロッパのことについては分かりますけれども、アメリカのことは全く知らないんですが、フランス刑法では動物に対する虐待というのは刑法の中で規定されているんですね。日本の場合は器物損壊で処理していたという事実があるんですけども、フランス刑法は動物に対する虐待というのは刑法典の中で書かれているというくらいに重視されているわけです。向こうで生活してみるとわかるのですが、もう二、三十年前の話ですけど、日本でも最近そうなんですけれども、ペットと一緒に家族一緒に旅行するということが家族の一員になっているわけですね。ですから動物と一緒に生活する、共生するっていうのはヨーロッパ人や欧米人にとってはごく当たり前の生活スタイルというふうになってきているわけです。それで一家無理心中ということになると向こうの国では、ペットまで道連れにしてしまうという逆のことも起きかねないわけですね。あと一家絶滅というような重い殺人事件も起きるわけですが、この場合も相手の家のペットまでも殺してしまうということが起きてしまうというのが欧米の殺人事件の特徴なんです。日本ではまさか一家全滅といってもペットまで殺すなんてそういうことはありえないし一家心中の時にもペットまで道連れにするかというのはちょっと日本の事件がどうなっているか分かりませんがあまり聞かない話ですので、欧米のペットとの共生という特殊な状況、あるいはこれから普遍的になるかも知れませんが、そういう状況を反映して無理心中事件や一家絶滅事件などというような大量殺人事件の時に動物が犠牲になりやすいと。欧米ではですね。日本でもちょっとその辺は心配な点かも知れませんが、これからは。

そういうことで人間と動物の共生ということでペット療法ということで、色々言われてきているわけですけども、先程ジョアンさんの話を聞いて、非常に用意周到になされていると、適応の問題も面接その他で含められていて、どういう人がそれに適しているかということの選択も慎重になされているようですし、その後の追跡についてもある程度資格のある方がしっかり追跡しているということで、治療としては技術的には確立しつつあるのかなという思いがしたわけです。しかしペット療法の中で動物の中で何故人間が立ち直っていくのか、あるいは社会的に適応していくかということについては、先程責任感とかあるいは忍耐力とか、あるいは動物に対する愛情のやりとりで信頼感の回復とかというようなことを言われたと思うのですが、あれは猫ではだめなんじゃないかと思うんです。犬のような訓練にならないんじゃないかと思うんです。私も数少ない体験ですが、実は私ペットが大好きで、

熱帯魚と池の鯉ですね、あと犬が多いときは室内犬と室外犬を飼っていて、あと猫もいます。猫を見ますと、前はヒマラヤ猫だったんですけども、今アメリカンショートヘアというワイルドな猫を飼っているわけですね。これは気ままな猫でしつけには向かない。ところが前の猫のヒマラヤ猫は、私自身がコタツに入ったり、わりあい気持ちがあつと緩んでいると近寄って来るんですね。イライラしたりしているとなかなか近寄って来ないので、猫が近寄って来るか近寄って来ないかで自分自身の精神状態を、フィードバック出来るというふうなことがあって、精神療法をやる時に精神療法家としては、出来るだけ猫が近寄って来易いようなムード作りをして、それから入るというようなことで、あまり仕事の難しい話の後でいきなり患者さんに応対するというをやめて、ワークセッションおいてから、それを思い出しながらやるというようなことを治療法に導入するきっかけになったのは、猫が近寄って来るのと近寄って来ないということがきっかけになったということなんです。あとやはり動物を通して人間不信、例えば家庭内暴力とか幼児虐待で相当人間不信になっている少年達がどうやって心を開いていくのかというワンステップに動物との体験学習というのは恐らく良いのだらうと思うんです。しかし考えてみればその背後には人間のその少年に対する眼差しが絶えずあった上で動物とのやりとりなんです。先程のお話ですと、その動物との間に愛情を獲得していく過程の中で、その背後にある親とか、まわりの人達の人間性に対する共感性が同時に、あるいは遅れて、発達してきたり、回復してきたりということがあるのです。やはり人間対人間との関係の中に動物が介在しているということです。動物だけで完結することではないということだろうと思うんです。あくまでもそれは人間対人間が、人間がどう人間と向き合うのかという基本的な問題の中での設定だろうというふうに思うわけです。

これは、そういう治療の導入にはやはり治療参加の意欲があるもの、あるいは対象をある程度コントロールして犯罪や非行歴の進んでない人、そういうふうな対象のコントロールが非常に治療の成果を決めるというふうな一般的な問題を述べているわけです。【スライド 17】

## 成功の鍵

多彩な治療プログラムの成功率は種々の因子によって変動する。言うまでもないことだが、成功の鍵を握る因子の一つが参加者の統制である。もしもこのプログラムが特定の犯罪者のみ、つまりは初犯で非暴力的で知能の高い者に限定するのであれば、このようなプログラムの方が、法廷が送り込んでくる者なら全て受け入れなくてはならないプログラムよりも成功率は高いものとなる。

【スライド 17】



【スライド 18】

これはうちの孫【スライド 18】なんですけれども、何故出したかと言いますと、最近リナレスという実存主義のフランスの北欧出身の哲学者が、人間の唯我論ですね、自分だけが存在してしまっただけで他者が存在するかどうかについての根本的な疑惑を乗り越える一つの哲学的インパクトというのは他者の悲しみを共有出来ることであると。悲しみと苦しみの表情の中、そこに確かに他者がいると確信できるのだというようなことを言っているんです。しかし、実は孫の顔を見ていたら、いやそれは悲しみじゃなくて輝く喜びに、やはり他者の存在がそこにあるんだというふうに思えるわけですね。ですからこういうふうな共感性とか、他者に対する喜び、悲しみも共有出来ることでエンパシー (Empathy) ということがやっぱり人間では非常に大事であろうと思うわけですね。それが動物との環境を通じてその Empathy の回復という人間にとっての対人関係の基本である土台が作れるんじゃないかということが期待できるということで私の話を終わりたいと思います。長々と有り難うございました。

山崎：どうも影山先生有り難うございました。大変色々面白い様々な理論、それから貴重なデータを勉強させて頂きました。ちなみに実は猫を使った刑務所のプログラムというのはあるんですね、ハムスターも、モルモットも実はいるんですね。猫の場合は、実は愛護施設のシェルターが満員になっているという問題を抱えている自治体の中で、たまたまその自治体に刑務所があり、その刑務所の職業訓練の一貫や、作業の一貫として動物の飼養管理を学ばせるということで、犬舎ではなく猫舎運営をやらせたというところがありまして、やはりおなじようにちゃんと猫の病気の勉強をし、猫の扱いを学び、その猫舎で実は育った猫達の方が新しい飼い主さんがつきやすいということが判明しました。何故かというシェルターはボランティア不足でなかなかハンドリングしてもらえないから、野猫ちゃんたちを馴らすのが大変と。だけど実は刑務所の中ですと結構その職員というか受刑者の方々が手間暇をかけて下さるのでものすごく人の手になつきやすくなるということです。ですからそういったケースもありますし、多分犬のトレーニングというのは一つの切り口で、それぞれいろん

な動物を使つての Empathy、さっき先生がおっしゃったような Empathy を作っていくプログラムは在り得ると思います。オーストラリアでは一時的ですけどもパピーウォーカーをやっていたという刑務所もありましたし、それからスコットランドの方では魚の養殖をいわゆる職業訓練としてやっていたところもありますので、今後はやはりそういった形で何が出来るかを日本も少し考えていく時期がそろそろやってきたのかなという気が致します。

## パネラスピーチ

社団法人 日本動物福祉協会 獣医師調査員  
山口 千津子



どうもご紹介有り難うございます。私の方は簡単に短くまとめてお話をさせて頂きたいと思います。先程から山崎先生が再三、皆さんが少しふわっとした希望に燃えて話がわっと大きくなりそうになるとちよちょっと水をかけてその話が少し収まるような方向にもって行って下さっているわけですが、私も人と動物の共生ということで人と動物が共に幸せな社会になって欲しいということを本当に望んでいるんですけれども、そこには必ず動物福祉がなくてはならないということで、お話をさせて頂きたいと思っております。

まずは、太古の昔は人と動物の関係で、ペットというふうなことはなかったですね。動物は動物で住んで人間は人間で住んでいて、食べる時ちよっと矢で撃って頂くというふうな状態だったわけですが、人間が動物を人間社会に引き入れた、そうしますとその野生社会で住んでいる動物の本来持っている動物の欲求を全て満たすことが出来なくなる。そこで私達は、その動物達の、人間社会に引き入れた動物達の一生の幸福に責任を持たなければならなくなって、そしてそこで動物福祉の必要性が生まれたということだと思えますね。そこで動物の福祉ってじゃあなあに?と言いますと、その動物の一生のそれぞれのライフステージで、人間だって生まれてから死ぬまで子どもから大人になって年取ってということがありますが、そこで肉体的・精神的健康、心身の健康ですね、とその動物にとっての快適環境が確保されてまわりの環境と調和して幸せであることである、ということだと思います。これってそのまま人間の幸せと同じなんですよ。動物だから、人間だからじゃなくて、人間も動物です。そして人間も動物も心も感情も五感も持っているということですので、よく「人間の福祉と動物の福祉、どう違うの」というふうに聞かれるんですけど、いつも私はその心は一緒ですというふうに言っております。そして今世界でこの動物福祉の基本ということで言われているのが、5つの自由、Five Freedomsです。まず1番目、それは飢えと乾きからの自由ということで、その動物自身にとって適切な食べ物、それからお水も自由に飲めるようにということです。それから2番目が不快からの自由。快適な環境を与えて下さいと。三番目が痛み、怪我、病気からの自由。痛みのないように、怪我をしないように病気をしないように健康管理をして下さい。でも万が一病気したらその時点での最高の獣医療を与えてあげて下さいということなんですね。4番目が、その動物種にとつ

ての自然な行動をする自由。小さなケージに入れられればなしで、例えばサル。小さなケージに入れられて自由がなければ、実際何回か見たことがあるんですけども、ずーっとエンドレスな回転運動をやっている。もう脳に異常をきたしているということですね。それから自虐、ずーっと毛を抜いている。もう痛みとかもわからないという状況になっているということなんですね。これは人間も同じです。多大なストレスをかけられれば、自虐、やることあります。5番目が恐怖と抑圧からの自由ということで、多大なストレスをかけないようにしようということなんですけれども、この5つを確保してはじめて動物と人間が共に幸せに暮らせると思っています。この5つの自由ははっきり言って人間にもあてはまるのかな。動物も、なにも私達と共に暮らしている動物だけじゃない、この5つはもともと農業動物から言われたわけなんですけれども、農業動物にも実験動物にも全ての動物にあてはまるということで、これを世界の動物福祉の基本として世界獣医協会でも認められております。私達は今、全く動物と関係なく過ごしている人はいなくてあらゆる場所で動物と関係しています。あらゆる場面であらゆる目的で動物を使用しています。それは勿論食べることであるでしょう。働かせることであるでしょう。それから、障害者補助犬法が出来ましたけれども、障害者の補助があり、教育の目的であり、それからエンターテイメントもあり、ということなんですけれども、この中にはコンパニオンアニマルとして人と共に暮らす動物のことも含まれているんですね。そのことによって多分皆さんも沢山動物と共に暮らしている方であればお分かりのように、動物と共に暮らすことで本当に様々な恩恵を人は受けております。その良い例が私はこのジョアンさんがお話下さったプロジェクト・プーチのことだろうと思えますね。本当に感動的なお話で私もなんと素晴らしいお話、と思いました。再犯率がゼロというのも本当に素晴らしいし、これは人間側のことで素晴らしいと思えますけど、もう一つ私がほっとしたことは、この犬達が次の幸せな家庭に迎え入れられて、幸せな犬生を送っている、犬の人生ですね、犬生を送っているということに、私は本当にほっとして、ああ良かったというふうに思っているんです。けれども、これはジョアンさんが本当にしっかりとした指導のもとで犬の心身の健康管理、快適環境、負担をかけないトレーニング、多大なストレスを与えない配慮、それから犬の生涯の責任を持つというこれだけの配慮がなされているから成功しているんだと思えますね。このトレーニングが、先程から何度もジョアン

さんも強調されていますし、それから山崎恵子先生も強調されておりましたが、動物が本当に喜んで、陽性強化ですね、即ち褒めてしつける方法であるからこそ出来ることで、これももし強制訓練、力をもって訓練する方法でこれをやったらどうなるか。犬もおどおどとして、アイコンタクトというよりも、飼い主を伺うというふうな形で犬は本当に恐怖心を持った犬に育ちますし、少年達も力が自分を認めさせる最高の術であると学んで、世に出た後も力で全てを解決しようというふうになると思います。そうしますと再犯率ゼロどころか、100%までは言わないですけどひよっとしたらかなり高い再犯率になるのかも知れません。やはりきちんとしたトレーニング方法だからこそ、これが成り得ているんだろうなということなんですね。振り返って日本の場合で考えますと、何事でもブームで動きます。もうご存知だと思いますが、今はチワワブーム、チワワブームが終わったら今度はプードル、とかなんでもブームになります。そうしますとアニマルセラピーについても、本当はアニマルアシステッドセラピーですけど、それについてもアニマルセラピー、アニマルセラピーとマスコミではこんな素晴らしいこと、ということで報道しますと皆さんが私も私も、私もアニマルセラピーしているのよ、私もやりますのよ、と皆さんが手を出します。そしてまずその目的がありきでその経緯とか準備とか、最後まで責任を持つこともしない傾向が出てきております。今、ヒポセラピー、馬を、ポニーを使ってということが流行りつつありますというか既に流行っております。ところがその馬達、働けなくなったらどうなるんだろうという心配が私の心にはいつもいつもあります。まだ犬のしつけでも陽性強化じゃなくって、がーっとさっきチョークチェーンを使わないとおっしゃいましたが、でもそのチョークチェーンを簡単にちよっと向こうへ行こうとしたらピッと引っ張るような方法で訓練されている方もまだまだ日本にはいらっしゃいます。じゃあそういう方々がこのプロジェクトをやりたいと言って、トレーニングをすればどんな結果が出るのかな、っていうふうに考えますと、ジョアンさんのところのようなすばらしい結果じゃなくって、本当は治療する予定の行動が、逆にその傾向を強化してしまうということになって、それだけじゃなしに犬達も心を開くどころか心身にストレスを溜め込むことになると思うんです。本当に色々なところで今言いましたように、セラピーだけでなく障害者の補助、学校飼育動物とか動物を使って人間を助けよう、教育の一助にしようという活動が本当にあちらこちらで行われております。でもそれには本当に動物達が彼らの生涯のステージにおいて、その福祉と幸福が最大限に確保されている時のみ行われて然るべきだと思っております。そのことが、というよりそのことを肝に銘じていなければ、つまり動物福祉が十分配慮されていないところには、人と動物の絆、こんなものありません。人も動物も幸福になれないということだと思っております。このことは私達これからこういうジョアンさんのような

本当に素晴らしいことが日本で起こればいいなあというふうには思いますけれども、そう簡単に出来ないということは先程から色々な先生がおっしゃっておられます。お金もかかる、人材も必要、そして動物の福祉を忘れてはならない、それが出来て初めて人も動物も幸福になれるということ、それを最後にお話して、私のお話は終わりにさせて頂きたいと思えます。どうも有り難うございました。

山崎：山口先生有り難うございました。非常に山口先生がおっしゃられた、人間の福祉と動物の福祉が同じだというのは恐らくまだまだ社会の中で分かっておられない方が沢山いると思うんですけど、それはすぐその直前に影山先生がおっしゃられた、猫が寄って来るか寄って来ないかに直結しているわけで、猫がなぜ影山先生に寄って行かない時があるかという、動物って皆お互いに環境のパロメーターだから、あの人が不快な顔をしているところへ行ったらきっと自分も不快な気持ちになるだろうからあそこには行かないでおこうというような、あそこ環境はどうなんだっていう疑問に多分つながっている部分もあると思うんです。だから逆に動物が不快な顔をしているところに人間はきっと近づきたくない、あるいは不快な動物を見たらそこはなんとなく何か起こるんじゃないかっていうところを考える。ですからそういったお互いの環境のパロメーターになっている限りにおいては動物も幸せじゃなきゃいけないし人間も幸せじゃなきゃいけない。学校のうさぎは子どもが近づきたくなる存在になっているかという疑問に結局つながっていくわけだと思うんですね。こういったところでプレゼンターの方々三人から非常に様々な角度からのご発表を頂きましたので、次にパネルディスカッションに進みたいと思えます。

## パネルディスカッション

座長 山崎 恵子 (ペット研究会「互」主宰)

パネリスト

ジョアン・ドルトン (プロジェクトプーチ社 常務取締役)

青山 幸克 (法務省 奈良保護観察所 所長)

影山 任佐 (東京工業大学 保護管理センター 教授)

山口 千津子 ((社) 日本動物福祉協会 獣医師調査官)



山崎

それではパネルディスカッションの中で、私がつたない司会ではございますが先生方に幾つか問題提起をさせて頂いて、それに関してご返答をそれぞれのお立場から頂きたいというふうに思っております。まず最初に、やはり先程から再三皆様も思っていることですし各先生方もお触れになっている、Why?という質問、なぜ再犯率がそんなに少ないかということについてのコメントを頂きたいと思うんですが、これはジョアン先生のプログラムだけではないんですね。皆さんおそらく日本でも番組が幾つか流れていますのでご存知と思いますが、オレゴン州のもう一つ北のワシントン州の州立女子刑務所でやはり介助犬の訓練などを行っているプログラムがあるということをご存知かも知れません。大塚さんという方がその本も出されておりますが、それでも犬班、犬のトレーニングや飼養管理に関わっている女性の、この刑務所は重犯罪者ばかりですが、重犯罪者の再犯率というのはゼロなんですね。つまりそこから刑務所を卒業して外に出て行った女性達は二度と戻って来ないということですから、これは決してプーチプロジェクトに対してユニークな結果ではない。では何故そうなのかということをごそれぞれ皆さん少しずつお触れになられましたけれど、その部分をもう少しご意見を伺ってみたいと思います。ちなみに私が一番思いますのは、ジョアンさんがおっしゃっていた、犬スキルではなくてピープルスキル、すなわち人間と接触する技術も当然犬のトレーニングの一貫として入っていくことがとても重要だと。それがもう一つ更にそこから膨らませれば、人と動物の関係学の一つ最初の頃の研究

の主題って言うのは、動物の社会的潤滑油、ソーシャルファシリテーター効果というものなんですね。動物がいることによって、人間同士が互いにこの人はきっと悪い人じゃないという見方をしたり、あるいは公園でただ座っているよりも猫をひざにおいて座っていた方が周りの人が声をかけてくれるとか、そういったその人間の社会にインテグレーションされるきっかけとしての動物がいる為に恐らく出所した後でも疎外感を感じることがないという利点があるという、そういった考え方も一部成り立つのかなという気も致しますけれども、それはあくまでも私の考え方ですが、先生方にご意見伺いたいと思います。まず最初にジョアン先生いかがでしょうかこの点。何故再犯率がそんなに低く、あるいは全くないことになるのか。



ドルトン

私が思いますには、恐らく先程申し上げましたように、ただ単に一つのことだというふうには思いません。いろんな要素があるでしょう。我々のプログラムですけれども、プログラムの中では別のスキルも向上させなければいけないわけです。一貫してスタンダードが高くなっていくわけですね。どんどん高くなるわけです。そしていわゆる無条件の愛、犬に対する無条件の愛を感じますと、このプログラムを離れたくないと思うんですね。ですから他の処遇に関しても同じだと思います。こういったアイデアが彼等は非常に好んでいる、すなわち他のスキルを学ぶという考え、これも非常に素晴らしいことだと思います。そしてビジターに来て頂いて、例えばピッツァやソーダなどを出してもらって、そうすると実際にそういったものをお出しすることによって人間との関係も高まると。ただ単に犬との関係だけではなく人間との関係も深めていくと。そして人の言うことを聞くということも出来るわけですね。他の人が何を言っているか、そして彼らの人生、彼らの犬、彼らの子ども達がどういうことになるか聞けると、聞く耳を持つということなのです。そして犬のスキルが向上することによって自分自身の自信が付くわけです。そして我々が使っている言葉ですけれども、Empowermentという言葉があるんですね。力をつけると、即ち世界に対してなにかを提供出来るんだという気持ちです。今まで我々は非常に失望していた。そして監

房に閉じ込められていた。そしてこれはあまりよくなかったことだと思います。即ち彼等に対して Empower、力を与えることが出来るということなんです。

山崎

Empowermentというのは今の人間の福祉の世界でもキーワードになってきていますね。様々なこと、些細なことでもいい、今日の夕飯はご飯にするかパンにするかって決めるだけでもいいから、例えば老人ホームなどでさせてあげることによって老人自身が自分の決定権を持ったという自尊心の向上に繋がる。Empowermentというのがやはり動物をきっかけに手に入るというようなことも知れません。それではその次に青山先生いかがでしょうか。



青山

動物セラピーの再犯率ゼロということですか？

山崎

そうですね。セラピーという言葉があれかどうか分かりませんが、作業所の中で色々ある中で動物関係の作業所というのが実は再犯率が低いというのはアメリカでは言われていることなんですけれど。

青山

私先程言いましたように無期刑の仮出獄の再犯率がほとんどないというふうなことを申し上げたんで、ちょっとその絡みで考えていたんですけどね、一つはやっぱり適応ケースの選択というふうなことが非常に大事な要素だと思うんですね。やっぱり社会生活に適応出来るそういう能力の見極めっていうふうなことが非常に大切な要素である。そして先程ジョアンさんが色々、予算とか人員とかそれからいわゆる接触の技術、そういった色々な要素があると、その中でも私は本当に更生して、更生の立ち直りの意欲というのが固まったというふうな、その中で援助すれば完全に立ち直るだろうというケースの選択だと思います。

山崎

有り難うございます。先生がおっしゃっていることは実は動物愛護とか色々なことで最近言われていることで、底辺を底上げしようと言うことも大切なんだけれども、資源を本当にうまく使おうと思ったらむしろ教育しがいのあるところに全資源をまずだーっと投じて、トップエリート集団というちょっと変な言い

方でですけど本当にきちっとやってくれる人を育てることによってむしろ最終的には社会全体が変わっていくんじゃないかというそういう考え方も非常に色々な分野ではあまるのではないかなという気が致します。影山先生いかがでしょうか。



影山

再犯率ゼロというのは驚きで、ジョアンさんも書いてるように大体何年ぐらいのフォローアップで再犯率がゼロなのかという問題が一つあると思うですね。後お話の中で触れたんですけども、色々な犯罪者が入っていて罪名もバラバラですけども、まずあの、成功の秘訣と言うことで最後の方にスライドお見せしたんですけども、やはり対象選択のコントロールがうまくいくかどうか、均一的な手段かどうか、あるいは治療意欲のある人達が入ってきているかどうかというような問題がやはり大きいので、やはり対象選択ということだと思うんですね。あと面接の段階で強調されていたのが、動物虐待の起用歴のない人を選択に選ぶということなんです。そうすると動物虐待と暴力犯罪との関係をマクドナルドさんの兆候ということをお話したので、そうすると対象選択の中で比較的暴力性の低いような人達が入ってきているのかなということもある。その辺のところの対象選択がきちんとなされていってその後治療法期間は大体3ヶ月位のプログラムだとお話をされたかと思うんですけども、その辺の3ヶ月なのか、もう少し長期間でやるようなケースも出てくるのかという問題もありますし、あと途中でドロップアウトするような人達の割合がどの位なのかというデータもお示し頂ければ参考になるかなというふうに思います。以上です。

山崎

有り難うございます。ちょっとジョアン先生にそのあたりをお話頂いた方が良いのかも知れませんが、恐らく先生がおっしゃっているように途中でスクリーニングというのもありうるんですね。ワシントン女子州立刑務所の場合には、模範囚であり続けられない限りには犬舎の管理には参加させてもらえないということがありますので、途中でドロップアウトする人が出てくればそれは結局そういった適応能力がない人ということでもシフトアウトされていってしまうということはあると思います。ただそのプログラムの中にやはりずっといたいという意欲が高い為に実はドロップアウト率はパーディ(ワシントン州立女子刑務

所)に関しては殆どないんです、プログラム自体がずっと10年以上の歴史が、あると思うんですが、そこでの再犯率がパードィの場合にはゼロということですからかなり長期に渡ってのフォローはしていると思いますが、ジョアン先生いかがでしょうか。

ドルトン

違いは確かにあると思います。成人のシステムとそれから青少年とは違うわけですね。多くの成人の場合に関しましては殆どそこで過ごすということが多いわけですけれども青少年の場合、更生施設にいる場合は多くの人達はその監房の中で殆ど重要な十代の時代を過ごすということなんです。そして彼らとしては将来何をしなければならぬか、私の人生を変えるにはどうしたらいいかと、どうやったらここを出られるかということを考えるといます。例えばガールフレンドが出来るかも知れない、車を買うことが出来るかも知れない、仕事を得ることが出来るかも知れないと考えるわけです。ですから二つは非常に違う人口集団ということになると思います。青少年の場合は、青少年期に収容されるわけですけれども、どのように人付き合い、交友関係を持っていくか、対人関係を持っていくか、それからその犬に対してどのように接していくかということですが、青少年の場合はこのような子ども達に対してスキルを提供する、そうすることによってただ単に対人関係を避けるというのではなくて対人関係を持つという方向にもっていくわけです。ですから母集団によってかなり違うと思いますね。収容されてからどのように対応するか、それからどれだけ長く収容されているかによってもそれはやはり違ってくると思います。



山口

私の方もお二方の先生がおっしゃってくださったように、本当に面接もし、前歴をきちんとチェックされて、十分な準備のもとにされているということが、このプロジェクトを成功に導いているのかなということと、やはりその動物の力、それがその人間のその子の本質を引き出してくれたということが成功につながってるのかなというふうにも思います。この十分な下準備というのがどれだけ出来るかということによって成功率が違って来るんだろうなというふうにも思います。

山崎

有り難うございます。それでは次のポイントなんですけれど、これはあの、色々な見方もあると思いますけれど、先程の影山先生がおっしゃった生活ソフト欠乏症にもちょっと関連していきたいと思います、動物を扱うということの教育的な、特に青少年にとっての教育的な影響はどういうものか、恐らく動物というのは生活ソフトを子どもあるいは青少年に与える一つの重要な道具という言葉はちょっと失礼な言い方もしませんが、道具になるのかなという気持ちは実はあるんですね。やはり動物と接触することによって生き物と接触すると、避けられないような不快なことをせざるをえないことも沢山あります。それは動物だってそれこそ、汚い話ですけれどもお腹を壊したり吐いたりすることもあればハチャハチャになって言うことを聞かないこともあるとかで、そういった中でそれら全てを許容しなければいけないというのが生活力を育てることにつながるということなんでしょうか。いかがでしょうかジョアン先生。

ドルトン

はい、おっしゃる通りです。私思うんですけれど、プログラムの中でも分かってきております、この青少年の方が新しいものを学ぶことに対して開放的です。もう全部学んだと考えている大人とは違うわけです。大人であればやはり自分で色々なことを選んできたわけでありまして、また違うところがあると思います。ですからやはり青少年の方が犬のことであれば本当に最善の友達になれる、青少年ならその可能性があるといます。そして一緒に過ごしたいと考えます。そして他の子ども達と同じよう自分も犬と一緒に過ごしたいと考えるようになるようです。そこで犬のプログラムというのは一つのインセンティブにもなり得ると思います。その犬のプログラムをやっていない子ども達で、「あ、自分もやりたい」と考えたり、またそこから学ぶということもお互いにありますし、また我々が行っておりますセラピーでも、このピアートレーニング (Peer Training) というものがあります。即ちこの仲間同士というのはお互いに影響を与えあうわけです。青少年の仲間同士でお互いの行動とかそういうものに影響を与え合ってより良い状況になる、ジェイソンがビデオに出てきましたけれど、本当にジェイソンの経験を皆聞きたがります。私が話をするよりもジェイソンの話を青少年は聞きたがるわけですね。

山崎

青山先生いかがでしょうか。

青山

難しいですね。私明日ジョアン先生が少年院で話をさせて頂くということで、ちょっと今すぐアメリカの少年院が財政にも人員にもすぐ恵まれている中で、日本の本当に人員不足でいわば矯正教育も難しい感じもあるというふうな中で、ジョアン先生の話がどのように受けとめられるかなというふうなことにちょっと思いを寄せていたような感じなんです。その点

で頭が一杯になってきて、ジョアン先生に話をさせて頂いて何か夢の世界の話を聞いたなあというふうになってしまったのでは、何の為に来て頂いたのかなあとこんなことになっていますので、その点を一緒にちょっと後で話させて頂きたいと、そんなようなことばかり考えています。

#### 山崎

有り難うございます。でもこれは、恐らくこの世界だけではなくて例えば動物介在療法なんかの話をするときにも同じようなリアクションを日本の聴衆の方からいただくことはあるんですね。でもやはりまず第一歩というのはやることじゃないんですよ。第一歩は意識改革ですから、それが出来ればやるということに関してはこれは一足飛びに出来るというようなことでもないですし、たとえお金があって人員があっても出来ることじゃないですから、青山先生を含めてまわりの例えば職員の方々などが特に、青少年よりも職員の方々、そうなんだということを受容されるのが大切です。しばしば私がこれをいうと多分うちの学生達はもう耳にタコができたと思うんですけど、ペットと動物というのは日本の社会においてはどうもB級研究課題なんですよ。B級研究課題ではないんですよ。実は人間の生命に一番根本的なところで繋がってすごい大きな影響を与えるんだけど、いやいやいやいや、ペットのことはまあまあまあと言われてしまう世界の意識を変えんという意味においては、やらなくてもいいから、情報・話をやはりこう広げていきたいっていうことを私は毎日頃から実は感じているんですね。では影山先生、どうぞお願い致します。

#### 影山

私の方は人と人が向き合うのが我々の仕事だということですが、そこにペットが介在した時にどのようなダイナミズムが生まれてくるかというような問題提起だと思うんですね。やはりあの、一つあの、その中で最初いったように、私の提唱した生活ソフト欠乏症といって、物質文明の中における豊かな中で生活に慣れきってなかなかそれを離れたようなところでの生活し難さ、あと人間関係でのコミュニケーション能力の欠如という意味では、動物飼育を通しての学習体験ということについてはその2つとも満たすような働きがあるので、生活ソフト欠乏症の改善にはペット療法ということはあるかなという思いを一つしております。あともう一つは、さっき言ったように人と人との交わりの中でということなので、恐らく動物を介して、そういうことをしている背後にあるその矯正関係者、あるいは家族の眼差しがその次のステップに行くかどうかにとってやはり大きなところで、動物の段階だけに留まっているということになると、それは自己完結的であって、社会復帰という形になかなか行かないと思うんですね。ですからそのところに動物を通してやはり人間の中に入っていくと、あるいは人間との関わりの中に入っていけるというようなところの気付き方という意味での導入段階としてやはりペット療法があり

得ると。その適応としては幼児虐待とか、家族からも見捨てられて色々な体験をして人間不信に陥ったような子ども達には非常に良いのかなというふうな思いがしています。もう一つは先輩達の、OBが関わってきているということで、自分達のかつての姿からああいうふうになれるんだっていうモデル提示がきちっとされていることなんですね。やはり励みになるだろうし、無用の孤立感で自分達だけが悩んでいるじゃなくて悩んでる人がまた先輩達にもいて、ああいう姿になったんだというね、そういうOBの関わりあいがうまく使われているということで、やはりそこには人が関わってくるということで、動物とその少年だけの二人の中でやはり完結はしていないと。という開かれた体験の中で治療が行われているというようなところがミソなのかなと、肝心なんだろうというふうに思っております。



#### 山崎

有り難うございます。恐らくそこで結局人間も動物ですから、動物との接触が人間を見せてくれるステップになり得るのが、いわゆる自然な行動学に結びついた陽性強化法だと思うんですね。モチベーションがなければ動物は動かないということに関して、それを学んでいくと、それこそ人間の世界を見る、便乗商法とかモチベーションを使っているんなことが出来てしまうという、そういった人間行動学を恐らく動物のトレーニングを通して学ぶということも一つのきっかけになるのかなという気は致します。山口先生いかがでしょうか。

#### 山口

そうですね、結局は人間のことで、やはり人間とのコミュニケーションがとれるようにリードしていくという、人間と人間のコミュニケーションが最終の目標でもあると思いますので、そこに動物が介在することをもって、先程先生方もおっしゃいましたけれども、最終目的の人間と人間がうまくいくように、リードしていく筋道がなければこのプロジェクトもううまくいかないだろうなというふうに思います。その導入として動物というのは良い役割を果たしてくれると思います。皆さんペットを飼ってらっしゃる方は、ペットといいますか犬や猫を飼ってらっしゃる方はもう十分お分かりだと思いますけど、夫婦喧嘩しても、夫婦の間で口もきかなくとも、口もききたいけど言えない、そんなときは犬を通して猫を通してお互い始まることになってい

つまにか夫婦の間で会話が戻ってくると、いうふうなこともあることは十分お分かりだと思いますので、その辺がやはりうまく人と人との間をとりもってくれる、それが最終的には人と人とのコミュニケーションがうまくいくということに繋がるということがここで証明されて良いリハビリになっているんだろうなというふうに思っています。

#### 山崎

耳が痛いですね。うさぎに向かって「今日もパパはお酒を飲んできましたねー」と言っている自分が目に浮かびます。はい、私でございます。それでは、色々はまだ伺いたいことがございますけれど、フロアからの質疑の時間、4時半までこのお部屋を使わせて頂いているということで、ちょっとしか時間が残らなくなってしまってお大変申し訳ないんですけど、質問を一つ二つフロアからお受けしたいと思いがいがでしようか。

#### 質問者

ジョアンさんにお聞きしたいのですが、私は小さい時から猫とかモルモットがいたから動物に対する良さとかすごく分かっているつもりなんです、そういう少年院とかにおられる方達、犯罪を犯した方達には動物を嫌いな方とか、あと動物と接していない方もおられると思うのです。拒絶反応とかないですか?あと動物に対するいじめとか、ないでしょうか?そこら辺ちょっとお聞きしたいと思うのですが。



#### ドルトン

監督されている立場でありますので、そういったいじめをするということは許されないということになっています。例えば青少年の中には勿論犬に対して恐れを抱いている子ども達もいるんですね。過去これらのプーチの中で実際に経験したことがあるんですけど、非常に怖がっている子ども達に対して犬を非常に近くに連れて行ったんです。そしてそれはあっさり私は介入したわけですね。例えば弟さんが、あるいは妹さんが犬を怖がっている場合はどうしますか。あなたの妹さんや弟さんに対して、怖がらないでというようなことを教えられますかと言うんです。そしてこの怖がっている子どもに対して、是非こういったことを一緒にやっというよということを言うんです。幾つかケースがあるんですけど、例えばトリートメントプログラム、治療プログラムの中で幾つかのプー

チのプロジェクトであるんですけど、お父さん、それぞれのお父さんが怒ってしまうようなことがありますよね。そして動物を虐待してしまうようなことがあります。これはレッドフラッグなんです。こういったお父さんを持っている子どもに対しては気をつけなければならないわけですね。どういうふうな行動をするか、即ちモデルが既に家族の中にあっただけです。このような場合、例えばプーチのプロジェクトのビジターがあっただけですけど、この青少年一人の子どもが犬舎の後ろの方で座っていて犬が吠え出したんです。何が起こったんだって私聞いたんですね。そうすると彼がいうには、この少年が言うには、犬の首輪をつかもうとしたけれども耳をつかんじったんだよ、といったんです。これが本当かどうか、どういことですけども、こういうときにはやはり介入しなければならぬ、すなわちカウンセリングをしなければならぬ、そしてフォローアップをするんですね。この治療のカウンセラーと共に話し合います。彼にとってはこういったプログラムをやるのはよくないということを判断します。これだけなんです、今までのケースとして実際にこのような、監督というものが必要ですよ、やはり同僚の監督も必要だしスクリーニングのプロセスも必要です。こういった青少年が例えば動物虐待の過去のある青少年を入れるということに対しては非常に気をつけてスクリーニングしなければなりません。これでお答えになりましたか。スクリーニングのプロセスが非常に重要なんです。

#### 質問者

皆さんにお伺いしたいんですけども、プロジェクト・プーチでは犯罪を犯してしまった方に対しての更生プログラムなんですけれども、そこまでまだ行かずに、もうちょっと、犯罪を少し起こしてしまったり、それから起こしそうな子ども達って、いますよね?そういうことに対しては、この動物介在というものは有効になるものなののでしょうか。どうなのかちょっとお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

#### ドルトン

人間社会では犬をいつも、例えば猫も使っております。そういうものを若い人達の拘置所とか学校に連れて行きます。そして例えば貧困の、あるいは片親の家庭とか、そういうところの子ども達に来て、そしてそれはカウンセラーとか色々な方のお手伝いが必要なんですけど、問題があるような人たち、そういう人たちが接触出来るようなそういうことを考えております。アントニーという男の子がプログラムに参加しました。彼はそのような教育を受けました。そして彼は、このポートランド出身なんですけど、そこでは黒人の人口が非常に多いところでした。多くの場合、いつもじゃなかったんですけど、多くの場合なかなか動物の世話の仕方を学ぶことが出来なかったということがあります。そこで色々な教育を行ってそして学んでもらえるようにしました。そういうことがあります。

山崎

必ずしも動物ではなくて、日本でも早期介入と言うことでいわゆるアットリスクの青少年に対して、これはですから収監される前の人達に対してスクリーニングをやったりあるいは何か事件が起こる前に早期介入するような手段というのは日本にはあるんでしょうか。

青山

虐待にしても非行にしても、発見すれば専門機関に早期につなぐということが今本当に求められているということが一点あるんですが、ただ今私が思うには、専門機関そのものが、機能しているのかというふうな問題もあります。こんなこと言ってしまうとちょっとあれなんですけど、須磨の事件にしても、お母さんが心配されて毎週児童相談所に通っていたんですね。その中でどんどんエスカレートさせていると。私はその須磨の事件についても、既に仮退院してきているのですが、どういふふうなプログラムのもとで少年を指導したのかというふうなことも全く開示されないと。であれば、同じような指導をまたしてしまうんじゃないかということがあります。だから私はもう少し専門機関も、もっと情報開示して、しなければならぬと、専門機関に繋ぐということであっても警察であれ児童相談所であれ観察所であれ、少なくともその専門機関が機能するというふうな、本当に対応をきっちり出来るというふうな信頼を回復しないとだめだと私自身肝に銘じている次第であります。

山崎

有り難うございます。影山先生、学識経験者として専門機関に対してはどういうふうに？

影山

お金も人もやっぱり十分に配当していないという、現場の先生方からの不満は相当あると思うんですね。事件数も増えてきているし、時代背景が違って相当インテンシブに治療しなくちゃならないケースも増えてきているので、それに対する対応が随分遅れているとは思いますが。あともう一つさっきの質問なんですけれども、結局予防効果があるかどうかと、再犯防止ではなくて、早期介入によって犯罪を犯す前に犯罪を犯さないようにするような予防効果があるのかどうかという質問だと思ってしまうんですけど、あと早期介入がなされているかどうかという問題と、この二つなんですけど、早期介入については、ステージを踏んで例えば退学とか、学校へ来なくなって怠けているとか、タバコを吸うとか、色々な雑誌で危ないものを読んでいるとかという、そういう目に見えるような形で顕示的になってきてステージ踏んできている場合には早期介入が出来てくるし、これは古典的な手法で今までやってきたんですけど、最近の犯罪はいきなり型とか、そういう分類もしているように、一見何も問題ないようなところにいきなり重大犯罪が起きてしまうという突発的な犯行が比

較的多くなって目立つようになってきているので、その辺のところの早期介入がどのように出来るかっていう問題があると思うんですね。ですから古典的なタイプはそれなりに出来ると思うんですけども、例えばパチンコ屋に行っているとか、その辺のところの段階で補導すれば、初期の段階でやるということですけども、なかなか今の最近のいきなりこう突発的に重大犯罪が起きるってことについてはステージなかなか踏んで介入出来てないということもあると思うんですね。あともう一つは問題設定として、皆さんの中に犯罪者にならないんだと、動物飼ってらっしゃって一緒にやっている方はこういう集団は、という問題設定だろうと思うんですね。ですから家庭内において、子どもさんの育て方、あるいは自分自身の自己治療的な形ってということが相当あるだろうと思いますので、皆さん方が普通一般の人口に比べて犯罪発生率が低い集団だということであれば予防効果があるということだろうと冗談めかして答えておきたいと思います。以上です。

山崎

有り難うございました。大変申し訳ありませんがそろそろ時間ぎりぎりということで、パネルディスカッションをここで打ち切らざるを得ないと思います。私のつたない司会でこのように時間がちょっとルーズになってしまいまして、申し訳ございません。最後に、富永さんにマイクをお返す前に、パネリストの先生方にあらためて心から御礼を申し上げたいと思います。どうも有り難うございました。



富永

皆様有り難うございました。また座長をお勤めいただきました山崎先生、本当に有り難うございました。座長の山崎先生にもう一度大きな拍手をお願い致します。これだけの先生方をお迎え致しましたので、なかなか時間が足りなくて大変申し訳ないと思っております。しかし今日は今回初めてのトライアルということでウェルカムパーティをオープンにさせて頂きました。お時間も迫っているんですけども、午後5時より7時くらいまで31階でウェルカムパーティをさせて頂きたいと思っております。実費の方二千元だけ頂戴致しますけれども、ご予約でない方、これを聞いてもうちょっと参加したいと思われる方、パネラー以外の方で今回ご来場の中にも沢山素晴らしい先生方、お見えになっております。直接お話出来る良い

機会かと思しますので、どうぞ受付の上、参加して頂ければ  
と思います。もう少しお時間を頂戴したいと思います。

このシンポジウム、様々な方のご支援によって開催されてお  
ります。ここでご後援を頂きました団体のご紹介をさせていただきます。  
敬称の方は略させていただきます。兵庫県、神戸市、兵庫  
県教育委員会、神戸市教育委員会、社団法人日本獣医師  
会、社団法人兵庫県獣医師会、社団法人神戸市獣医師会、  
財団法人日本動物愛護協会、社団法人日本動物保護管理  
協会、社団法人日本動物福祉協会、社団法人日本愛玩動  
物協会、社団法人日本動物病院福祉協会、駐大阪・神戸  
アメリカ合衆国総領事館関西アメリカン・センター、こちらよ  
りご後援を頂いております。それからこちらのホテルのオーナー  
でもあられます、財団法人中内力コンベンション振興財団よ  
り毎年のご助成を頂いております。それからご協賛と致しまし  
て、昨年に引き続きましてアサヒビール株式会社様、今年度  
より社長もお見えになっていらっしゃいますけれども、株式会  
社カワイ音響システム様、ご協賛有り難うございます。またカ  
ワイ音響システム様は、ペットの防音システムを用いたお家  
を作っていらっしゃるんですけども、その新商品の試作品を  
今回パーティ会場で展示させて頂きたいということでお持ちに  
なっていると思いますので、飼っている方のコメントを頂きたい  
ということですので、皆さんしっかりご覧になって  
厳しいご意見を差し上げて頂きたいと思います。それから最  
後になりましたけれども、この私共の国際シンポジウム、四回  
ともネスレピュリナペットケア株式会社様より特別な協賛を頂  
いております。これを続けることが出来ておりますのも、大きな  
ネスレ様のご助力によるところが大きいです。本日フラー社長  
がお見えになれないということで、実は来年のご支援ももう約  
束して下さいました。来年どんなテーマをお届け出来るか分  
かりませんが、来年もまた皆様にお会い出来るようにし  
たいと思っておりますので、どうぞお楽しみにして頂きたいと  
思います。ご支援を頂いた皆様にこの場をお借り致しまして  
厚く御礼申し上げたいと思います。本当に有り難うございま  
した。また会場の皆様方には長い時間有り難うございました。  
またパーティでお会いしたいと思います。本日は有り難うござ  
いました。

発行：2004年9月7日

**特定非営利活動法人 Knots**

〒650-0004 神戸市中央区中山手通 6-6-7-405

TEL/FAX:078-341-5884

URL: [www.knots.or.jp](http://www.knots.or.jp)

E-mail: [info@knots.or.jp](mailto:info@knots.or.jp)

Copyright © 2004 "NPO Knots" No reproduction or republication without written permission.